

この息子は鈍物で、野良で働くことさへ出来ませんでした。或る時息子の母は父に申しました。

「あなた。あの馬鹿息子のために、この家も亡ばされて終ひますよ。だからね、今のうちにあの子を家から追ひ出して、あの子は一人で此の世を送るやうにした方が良いぢや有りませんか。」

そこで両親は、一人息子を追ひ出すことにしました。それで或る森の中へ汚ない破れ小家を作つてやり、瘦せこけた小馬と、一羽の雄鶏と五羽の雌鶏とを呉れて息子を追ひ出しました。憐れな小さいクズマは、暗い森の中で、ほんとの一人ぼつちで淋しく暮さねばならなくなりました。

すると、一疋の雌狐が、同じ森の中の、クズマの小家に近い所に住んで居りました。そして、直ぐとクズマの鶏を嗅ぎ出し、是非ともクズマの小家をお見舞してやらうと心にきめました。或る日のこと、小さいクズマが獵に出掛けると、直

ぐその後へ、平常から隙を狙つてゐた狐が飛び込んで来て、一羽の雌鶏を殺し、それを火に焙いて食べて終ひました。クズマは獵から歸つて来て見ると、雌鶏が一羽もなくなつてゐます。クズマは、

「鷹が下りて来て攫んで行つたに違ひない。」

と考へました。そして次の日も獵に出掛けました。すると途中で、狐とばつたり出逢ひました。

「クズマさん、どちらへ。」

と狐は、クズマに訊きました。

「僕は獵に出掛ける所だよ、小狐さん。」

「さうですか、さよなら。」

狐は、直ぐに、クズマの小家へ飛んで行き、又一羽の鶏を殺しそれを料理して食べて終ひました。小さいクズマは獵から歸つて、鶏を數へて見ると、又一羽足

りなくなつて居ります。

「ひよつとしたら、あの小狐奴が、僕の鶏を、やつつけたのかも知れない。」

といふ考へがクズマの胸に浮んで來ました。三日目にはクズマは、家の戸や窓をどうしても開かない様にしつかりと釘づけにして、それからいつもの通り獵に出掛けました。又昨日の狐が何處からか出て來て、クズマに挨拶をしました。

「クズマさん。どちらへ。」

「今日も、獵に行くのだよ狐さん。」

「さうですか、さよなら。」

狐は又も一目散にクズマの小家へ飛んで行きました。クズマは、今日は獵には行かずに、狐の跡をそつとついて行きました。狐は小家の圍りをぐるぐる走り廻つて見たが、戸も窓もしつかりと釘づけにしてあります。狐はどうして小家の中へ這入つたものでせうか。とうとう小狐は、小家の屋根へ匂ひ上つて、煙突から

すゝと這入つて行きました。そこへクズマは飛んで出て、とうとう小狐をつかまへて終ひました。

「やア、偉い盜賊が僕の所へお見舞ひに來て呉れたのだね。……少しお待ちなさいよ。小娘の狐さん。お前さんは、もう生きては、僕の手から出られませんよ。」そこで小狐は、クズマにお願いをしました。

「どうぞお願いですから、命だけはお助け下さい。その代り、金持ちの花嫁さんをあなたにお世話いたしますから、どうぞあなた、後生ですから、も一羽の鶏を、一番肥つた奴を、うまい油で焙いて御馳走して下さいませ。」

クズマは、しばし考へてゐましたが、思ひ切つて、も一羽の鶏を小狐の爲めに殺しました。

「さあ小狐さん、充分お食へなさい。そして宜しく頼むせ。」

小狐は鶏をみな食べて終つてから、口の邊りをべろりと嘗めながら、言ひま

した。

「此の森の後ろに、オーゴンといふ偉い王様が治めてゐる國がございます。王様のお后様はモルヤさまと申し、お二人の間に、非常に美しいお姫様がございませう。わたしは、そのお姫様のお婿様に、あなたをお世話いたさうと思つてゐるのでございます。」

「だつて、僕のやうな貧乏男を、婿に貰ふやうな人はありはしないよ。」

「まあお静かになさい。そんなことはどうでも良いのですから。」

小狐は王様の所へ出掛けました。途中は走り通しました。そして王様の宮殿へ入り、玉様と后様の前に、丁寧に挨拶をして、それから申し上げました。

「申し上げます。オーゴン玉様、並びにモルヤ后様。」

「いや良く来た狐殿。して何か良い知らせを持つて来たのか。」

「はい、實は、媒人になつて参上いたしましたのでございます。それは、クズマ、

スコロバガデーと申す花婿を、王様のお姫様にお世話いたしたいのでございませう。」

「その花婿は、何處に住んでゐるのか。」

「はい、その男は、荒い獸などを獵してゐます。それが、その男の楽しみでございます。」

「さうか、そんな男ならわしの姫の花婿にしてやる。では早速歸つて、その男に白狼を千六百疋だけわしの所へ連れて来るやうに、したら花婿にしてやると、云ひなさい。」

そこで小狐は森の下の牧場へ走つて行き、その真中へ立つて、大きな聲で狼を呼び集めました。すると一疋の狼が走つて来て云ひました。

「何處かで御馳走にありついたのでかね。偉い元氣で、呼んでゐるぢやないか。」

「僕は、もう充分御馳走を食べて来たから、もう欲しくないよ。僕は今迄、王様

の所で御馳走を食べてゐたのだ。君も王様の御馳走に招かれないとは思はないかね。……出来ない？ そんなことはないよ、だつて君、強い獣たちは、みんな招かれてゐたよ。しかも黒貂や黄鼬まで、数知れずお揃いだつたよ。僕が歸つて来る時は皆はまだ御馳走を食べてゐる最中だつた。」

それを聞いた狼は、ことばを卑くして、狐に願ひました。

「狐さん。どうぞ僕も王様の御馳走の席へ連れて行つて呉れないか。」

「宜しい、連れて行つて上げませう。それではね。明日迄に、お前の友人の白狼を、千六百疋だけ集めなさい。そしたら皆一緒に王様の所へ連れて行つて上げませう。」

翌る日、白狼共は数だけ集りました。狐は集つた狼共を連れて王様の白宮殿へ行き、一列にぞろりと並べて、聲高々と王様に申し上げました。

「オーゴン王様並にモルヤ后様、花婿は只今此の贈りものを持つて上りましたの

でございませう。そして、この白狼共の一群は、王様に御挨拶に参りました。みんな千六百疋居ります。」

王様は皆の狼共を圍ひの中へ入れて、そして狐に申しました。

「もし、わしの姫の花婿が、これだけの狼共を贈り物とすることが出来たならこん度は、同じ数だけの熊共を贈り物とせよ。」

小狐は、又小さなクズマの家へ行き、も一羽の鶏をロース焙きにして、腹一杯に食べ、それから森へ行き、大きな聲で熊を呼びました。すると、毛むくいやらの熊が、森の奥から出て来て、狐に云ひました。

「おしやべりの狐さん。君は、御馳走を腹一杯食べたに見えるね。でなけりや、そんなに楽し相に草の中で呼びまわつてゐる筈はないからね。何か起つたのかえ。」

「腹一杯御馳走を食べたつて、……さうかも知れない。僕は今迄王様の所で御馳

走になつてゐたから。いま王様の所には、僕の獸の仲間が澤山ゐるよ。しかも黒貂や黄鼬まで無数に集つてゐる。いまは丁度、狼等が御馳走を食べてゐる所だ。おいしい御馳走が澤山出てゐるよ。」

それを聞いた熊は、直きに狐にお願ひし始めました。

「小狐さん。どうぞ僕のこと、王様の御馳走の席へ連れて行つて呉れないか。」

「宜しい、連れて行つてやらう。それではね。明日の朝迄に、黒熊を千六百疋だけ呼び集めなさい。そしたら僕は悦んで、君達を王様の所へ連れて行つて上げるよ。王様の料理番は、君一人だけには、御馳走を作つて呉れないからね。」老ぼれの足曲りの熊は、森中をよろめき歩いて、多くの熊共へその知らせを傳へました。そして狐が云つた通りの數を集めました。狐はそれ等の熊共を王様の白宮殿へ連れて行き、一列に並べて大聲で王様に申し上げました。

「オーゴン王様、並にモルヤ后様、花婿は、只今千六百疋の黒熊を贈り物として

挨拶に参りました。」

王様は、その黒熊共をも、圍ひの中へ入れて、又狐に云ひつけました。

「わしの姫の婿が、狼や熊を贈り物として、これだけ贈ることが出来たのなら、こん度は、貂や黒貂を、同じ數だけ贈りものとする様にせよ。」

狐は又も、クズマの家へ行き、最後にも一羽の雌鶏と雄鶏とを殺し、ロース焙きにして食べてから、森の中へ行つて、叫び廻りました。すると貂と黒貂が馳せて来て、狐に云ひました。

「君はどこで、そんなに立派な御馳走に有りついたね。賢い狐さん。」

「何だつて、君達は森の中にはかり住んでゐるから、僕が王様の所で、偉い御馳走になつたことを知らないんだね。僕はね。狼共と熊共を、王様の御馳走の席へ案内してやつたよ。今頃は狼連も熊共も、甘い御馳走から離れられないでゐるでせうよ。何しろあんな御馳走は、あいつ等が生れて始めてだらうからね。」



そこで貂と黒貂の二疋は、狐にお願ひしました。

「わたし等の親愛する狐さん。どうぞわたし等を王様の所へ連れて行つて下さい。わたし達は、皆が御馳走になつてゐるのを、遠くから眺めてゐるだけでも結構でございますから。」

「それでは、君達仲間の貂や黒貂を、千六百疋だけ集めさせたら、みんな御馳走を戴けるやうにして上げるよ。だが、君達たつた二人だけちや、御馳走の席へ入ることは許されないからね。」

次の日、貂や黒貂共は寄り集りました。そこで狐はそれ等を王様の所へ連れて行き、花婿の爲めに、王様に挨拶をして、貂と黒貂との千六百疋を贈りものとしてしました。王様はその贈り物を受けてから狐に申しました。

「有り難う、お禮を申す。それでは、花婿に茲へ来るやうに傳へて呉れ。わたし達は、その男に逢いたい。その男も、もうわしの姫と逢つても宜しい。」



そこで貂と黒貂の二疋は、狐にお願ひしました。

「わたし等の親愛する狐さん。どうぞわたし等を王様の所へ連れて行つて下さい。わたし達は、皆が御馳走になつてゐるのを、遠くから眺めてゐるだけでも結構でございますから。」

「それでは、君達仲間の貂や黒貂を、千六百疋だけ集めさせたら、みんな御馳走を戴けるやうにして上げるよ。だが、君達たつた二人だけぢや、御馳走の席へ入ることは許されないからね。」

次の日、貂や黒貂共は寄り集りました。そこで狐はそれ等を王様の所へ連れて行き、花婿の爲めに、王様に挨拶をして、貂と黒貂との千六百疋を贈りものとしてしました。王様はその贈り物を受けてから狐に申しました。

「有り難う、お禮を申す。それでは、花婿に茲へ来るやうに傳へて呉れ。わたし達は、その男に逢いたい。その男も、もうわしの姫と逢つても宜しい。」

その翌る日、小狐は一人で又王様の所へ來ました。それを見た王様はお訊きになりました。

「わしの姫の婿は、何處にゐるのだ。」

小狐はそれに答へて申しました。

「花婿は、けふは王様の所へ參上出來ないといふことでございます。それで私から王様に宜しくとの事でございます。」

「如何したといふのだ。」

「はい、花婿は、只今大へん忙しいのでございます。花婿は、王様の所へ來るために、いろいろと仕度をしてゐるのでございます。そして丁度いまは、種々の寶物を數へてゐるのでございます。それで先づ銀貨を計るのだから、枴を貸して下さいとの事でございます。花婿の枴は、どれもく食貨で一杯になつてゐるのでございます。」

王様は詳はしいこともお訊きにならず、柵を貸して呉れました。たゞこれだけを狐に申しました。

「狐殿よ、この柵をやりませう。わしの姫の花婿は、この柵で金貨を間違ひなく計るだらうな。」

次の日狐は、又王様の御前へ出で、借りた柵を王様へお返ししました。(狐は、借りた柵の隅々へ、小さい銀の片をはさんで、いかにも銀貨を計つたやうにして返しました。)

「王様の姫様の花婿は、本日、有り限りの財産を持参して、王様の所へ伺ひますから、宜しくとの事でございます。」

王様は非常に喜んで、大切な御客様を迎へる爲めに、何から何まで萬事の支度を整へさせました。小狐は王様の所から出て、クズマの小家へ出掛けて行きました。クズマは二日前からストロブの上に寝たまゝお腹もべこゝになつて、すつ

かり弱り切つて狐を待つてゐました。狐はクズマを見るや云ひました。

「何だつて、そんな所に寝てゐるのですか。わたしは、オーゴン王様とモルヤ后様のお許しを受けて、あなたをお姫様の花婿にすることに極めて来たのですよ。さア起きて、早速出掛けて行き、結婚式を擧げて、盛んにお祝ひしやうぢや有りませんか。」

「仕うしたんだ狐どん、お前さんは氣違ひになつたぢやないか。着る着物もない僕が、どうして王様の所へなぞ行くことが出来るかね。」

「そんなことに心配することは入ませんよ。早く行つて、あなたの小馬に鞍を置いて、出掛ける支度をしなさい。」

そこでクズマは痩せ馬を家の軒端から引き出し、薦を乗せ、手綱を付けて、その上に飛び乗りとこゝと走らせて、狐の後ろについて出て行きました。王様の宮殿が見える所まで来ると、道に小さな橋が有りました。

「あなた、馬から下りて、この橋の柱の間から向ふを見やうちや有りませんか。」と小狐がクズマに云ひました。そこでクズマは力限り、橋の柱を鋸で挽き始めました。そして柱を挽き切つて終ふと、橋は、どんといふ音がして落ちて終ひました。

「早く裸體になつて、着物も馬も川の中へ放り込み、そしてあなたは砂の上に寝ころんで、わたしの歸るのを待つてゐて下さい。」

と狐はクズマに云つて、王様の所へ大急ぎで走つて行き、遠くから大きな聲で叫びました。

「王様、大事が起りました。どうぞ早く助けて下さい。」

「何事が起つたのだ小狐殿よ。」

と王様は驚いてお訊きになりました。

「あれ、あそこの橋が弱つてゐたのです。今王様のお姫様の花婿が、澤山の

寶物を持つて、あの橋の上まで來ましたが、あの橋が、重さに堪へず、碎け落ちて終つたのです。そして、花婿も寶物も下部もみんな一緒に川の中へ落ちて終ひました。花婿も、死んだ様になつて、砂の上に横つてゐます。」

それを聞いた王様は慌てゝ家來を呼びよせて叫びました。
「早く、クズマ、スコロバガデーの爲めに、宮殿の着物を持つて行き、それを被せて、死に掛つてゐる婿を助けて呉れ。」

王様の家來は、直ぐ橋の所へ飛んで行きました。するとクズマは砂の上に轉んでゐました。家來達は、クズマを抱き起し、良く身體を洗つてやり、宮殿の着物を被せて、髪を良く梳り大事にして宮殿へ連れて行きました。王様は花婿が無事に助つたことを大へんお喜びになつて、宮殿中の鐘を鳴らさせ、祝砲を打たせて早速結婚の式を挙げました。そして王様と后様とは、お姫様の花婿様として、クズマに冠をかむせました。クズマは、王様と共に永く住み、いつでも楽しさうに歌を

歌つてゐるといふことです。そして小狐は一生涯宮殿で暮し、宮殿の立派な役人となりました。そして再び森の中へ歸りたくはないといふ話してあります。(終り)

不老美人の女王様

今からずつとくむかし、或る國に、アフロン、アフロノピチといふ偉い王様が住んで居りました。この王様には三人の幼い王子がございました。長男をデミトリー王子と云ひ、次男をヴァシリ王子と呼び、三男をイワン王子と云ひました。この三人の王子達は段々と成人して、三男のイワン王子が十七歳になつた時アフロン王様は早や六十歳の高年に達して居りました。或る時アフロン王様は、ちつと考へ込みました。そして自分の王子達を見て急に悲しくなりました。王様は、
「考へて見ると、わしの王子達に取つては、この世は楽しいものぢや。王子達は

神様のゐます美しい世界に楽しんでゐられるのぢや。それに引き換へ、わしは老ぼれて行くばかりで、いろ／＼な厭なことが、わしを惱ますやうになつた。そうして、此の廣い世の中もわしに取つては何の楽しみともならなくなつた。これからわしは如何なつて行くのだらう。あア！ どうしたら、老ぼれないでゐられるだらうな。」

王様は考へに考へつくして、寝りにつきました。すると王様は夢を見ました。それは何處か或る遠い國に、不老美人の女王様が住んでゐるのであります。この女王様は三人の母と三人の祖母と、九人の姉妹を持つて居りました。そして女王様の枕の下には、「命の水」の入つた罎が隠されて有りました。この水を飲んだ者はだれでも、三十年だけ若くなるので有りました。夢から覺めると、王様は直きに王子達や、智慧ある家來達を呼び集めて話しました。

「賢い智慧のある皆のものよ。わしの夢判斷をして呉れ。如何したら夢の中の女

王様を見つげ出すことが出来るか。」

皆黙つてゐました。やがて智慧ある一人の家來が、長い灰色の頸髻を引つ張り四邊を見廻し、それから頭を掻きながらアフロン王様に答へました。

「この國をしろしめす王様、申し上げます。私達は、その不老美人の女王様を見たことはございませんが、耳にしたことはございます。けれど、如何してその女王様を見つけたら良いか、何處にお出になるか、それ等については、一向に存じませんでございます。」

これを聞くや否や三人の王子達は、聲を合せて父の王様に懇願いたしました。

「父上様、その名譽ある役目を私達に仰せつけて下さい。私達は世界中を隅から隅まで歩き廻つて、多くの人々にも尋ね、そしてその不老美人を是非とも探し出しますから。」

父の王様はそれをお許しになつて、三人の王子達に旅の仕度をしてやり、懇ろ

に別れを告げて、旅に出しました。三人は出掛けました。その町の城門を出た時に、長男次男の兄弟は右の方へ指して行きました。三男のイワン王子は一人で左の方へ指して行きました。長男次男の兄弟が、人里離れて僅か百哩ばかり來た時に、一人の老人に出逢ひました。その老人は二人の王子を見て云ひました。

「あなた達は、どちらへお出でなさいませ。遠くへ御旅行でございませうか。」

「そこをどけ老ぼれ爺、お前さんの知つたことぢやないのだよ。」

と王子達は、老人を怒鳴りつけました。すると老人は何も言はないで行つて終ひました。二人の王子は先へ行きました。その日も、次の日も、丁度全一週間歩きついでました。そして二人は、とうとう天地の區別もつかない様な、人も生物も何にもゐない、荒れ果てた廣い野原へ出ました。此の荒野の真中で、二人の王子は、前よりはもつと老ぼれた老人に出逢ひました。

「あなた達は、こんな所を遊び廻つてゐるのですか。それとも何か探し歩いてゐ

るのですかえ。」

と老人は王子達に訊きました。

「無論、僕達は探し歩いてゐるのだよ。僕達はね。「命の水」の入つた罈を持つてゐる不老美人の女王様を探してゐるのだ。」

「それは大へんなことですよ。あなた達は、そこへ探しに行かない方が宜しうございませう。」

「それは又、故ですか。」

「それではお話しいたませう。此の道を真直ぐに行きますと、三つの川がございます。どれも大きな廣い川でございます。その三つの川にはそれぞれ渡し場がございまして、初めの渡し場では、あなた達は、右の腕を切り落されます。二番目の渡し場では左の腕を切り落されます。三番目の渡し場では、とうとう首を切り落されますよ。」

二人の王子は非常に心配して、めまひする頭を、ぐつたりと兩肩の下にうなだれ、深い思ひに沈みました。

「そんな馬鹿なことは、自分達にはかりでなく御父さんに對しても出来ない。それよりも丈夫で生きて歸つた方が遙かに増した。又時節が来るのを待つことにしやう。」

そして二人の王子は引き返しました。二人はあと一日で家へ歸れるといふ所まで来た時にその林の中で休むことにしました。二人は、黄金の柱を立てて天幕を張り、連れて来た馬を放して、草を食べさせました。二人は天幕の中で休みながら云ひました。

「茲へ止まつてゐて、末の弟を待つことにしやう。それ迄は茲で遊んでゐやう。」
こちらのイワン王子は、別な方面へ遙か遠く出掛けて行きました。そして二人の兄達が逢つたと同じ老人に出逢ひました。その老人は同じことをイワン王子に

云ひました。

「あなたは、どちらへお出でになります。遠くへ御旅行でございませうか。」
イワン王子は、答へました。

「お前さんの知つたことぢやないよ。僕はお前さんには用事はないよ。」
イワン王子は老人と別れて、少し來てから、自分がいま言つたことを思ひ返しました。

「僕は何だつて、あんな亂暴なことをあの老人に云つたのだらう。老人といふものは考へが深いものだ。他分あの老人は、何か良い事を教へて呉れるに違ひない。」

そこでイワン王子は馬を引き返して老人に追ひつき、後から聲を掛けました。
「お待ちなさいお爺さん。僕は、お爺さんが先刻言つたことを良く聞いてゐなかつたのだよ。も一度言つて呉れないか。」

「も一度言つて呉れないか。」

「わしは只、あなたはどちらへお出でになるかと尋ねたばかりでございませうよ。」
「さうかお爺さん。實はね、僕は不老美人の女王様を探しに行くのだよ。その女王様といふのは、三人の母と三人の祖母と、九人の姉妹とを持つてゐるといふことです。僕はその女王様の所から命の水を貰つて來て、僕のお父さんに差し上げるのだよ。」

「さうですか。あなたは眞實のことを答へて呉れましたから、わしはあなたに良いことを教へて上げませう。第一あなたは、あたりまへの馬で行つたのでは駄目ですよ。」

「そんなら、僕は特別な馬を何處から連れて來やうな。」

「それも教へて上げませう。今からお家へお歸りになり、馬丁共に命じて、あなたのお父さんの馬を残らず海の中へ追ひやりなさい。そしてその中で、他の馬

よりも先きになつて、首を水面から出し、海の上を真直ぐに泳いで行き、そして、その馬が、海の水が大波の立つ程に海水を飲み始めたら、その馬をつかまいてお乗りになれば良いのです。」

「良いことを教へて呉れた。どうも有り難うお爺さん。」

そこでイワン王子は、老人が教へた通りをしました。そしてお父さんの馬の中で最も勇ましい馬を選び、夜通し番をして次の朝早く、鞍を置いて乗り、元氣よく出掛けました。すると馬は人間の聲を出して、イワン王子に話し掛けました。

「イワン王子様、しばらく下りて下さい、わたしは、王子様が英雄になる力を持つ様に、三度だけ、王子様を打ちます。」

さう云つて馬は、王子を一度二度と打ちました。けれど三度目には打ちません。「もしも、も一度王子様を打つたならば此の國中の者が集つても、王子様に敵することは出来ないでせう。」

と馬は云ひました。それからイワン王子は、馬の背に乗り、騎士の甲冑をつけ、王様の宮殿にある、昔の立派な剣を持つて深しに出掛けました。王子は晝夜歩きついで、一月二月三月と過しました。とうとう王子は、水は馬の膝までも没し、草は馬の胸迄も届く様な所へ来て終ひました。そしてイワン王子は可愛相にも食べるものさへなくなりました。やがて、荒野の真中に、汚ない小屋を見つけました。この小屋は鶏の足のやうなものの上に立つてゐました。小屋の中には骨ばかりに瘦せたバーバー、ヤーガーが、小屋の中一杯に足を延はして寝てゐました。王子は小屋の中へ入つて云ひました。

「お婆さん。こんにちは。」

「こんにちはイワン王子様、あなたはお遊びにお出でになつたのですか、それとも何か探しに来たのですか。」

「僕は探しに来たのだよ。遠い〜國の不老美人の女王様を探しに行くのだよ。」

そしてお父様にやる命の水を、その女王様の所から貰つて來るのです。」

「わたしは、その女王様を見たことはございませんが聞いたことはございます、
だが、あなたは、そこへはどうしても行けませんよ。」

「どうしてです。お婆さん。」

「それはね。この先に三つの渡し場がございます。第一の渡し場では右の腕を切り落されます。二番目の渡し場では、左の腕を切り落されます。最後の渡し場では、首を切り落されるのでございます。」

「宜しいお婆さん。この首一つ位は何でもないよ。僕は行くよ。神様の御命令だ。」

「おー、イワン王子様、お歸りになつた方が宜しうございます。あなたは未だお年も若いし、氣もやさしいのですから、そんな怖らしい所へ行つて、あぶない事をするとは出来ません。」

「いゝえお婆さん。行くと云つた以上は男だもの吃度行かねばならないよ。」

そこでイワン王子は、バーバー、ヤーガーと別れて、先へ進んで行きました。そして始めて第一番目の渡し場へ着きました。すると川の向ふ岸に、船頭が晝寢をして居りました。イワン王子は堤の上に立つて考へました。

「僕が怒鳴つたならば、あの船頭は聾になるに違ひない。又力一杯口笛を吹いたら、渡し舟がひっくりかへるだらう。」

それで王子は、静かに口笛を吹きました。すると船頭は直きに目を覺まして飛び起き、王子を渡して呉れました。

「渡し賃に、何を差し上げやうね船頭さん。」

とイワン王子は船頭に訊きました。

「何の爲めに値段などを訊くのだね。あなたのその右腕を下されば良いのだよ。」と船頭達は一聲に答へました。

「いや〜、この腕は、僕に無くてはなぬものだ。」

とイワン王子は答へてから、重い劔を引き抜いて、船頭達をめつたやたらに切りなぐつて半殺しにして、先へ進んで行きました。かやうにして、後の二つの渡り場も乗り越して、遂に、遠い國へ着きました。國の境界の所に一人の怖い男が、森の中の樹の如く、のつきりと、又乾草塚のやうにとつしりと立つて居りました。手には櫛の棒を持つて居りました。大男は、イワン王子を見ると云ひました。

「貴様は何處へ行くのだ、卑しい奴。」

「僕は、不老美人の女王様のゐらつしやる國へ行き、女王様から、僕のお父さんにやる命の水を貰つて來るのだよ。」

「何だうちびさん。俺は百年この方、女王様の國の番をしてゐるのだよ。今迄に多衆の剛傑が茲へ來たが皆、俺の手に掛つて殺されて終つたのだ。そしてその骨がそこら中に散らばつてゐるよ。貴様のやうな奴はそれに較べると蟲けらも同前だ。」

イワン王子はこの大男を打ち負かすことは出來ないと知つたので、馬を返して他へ向つて行きました。どん／＼と歩いて行くと、或る深い森の中へ來ました。そこに一つの小屋が立つてゐて、その中にはよく／＼に老ばれた婆さんが坐つてゐました。婆さんは王子を見ると叫びました。

「こんちはイワン王子様、どうしてこんな所へお出でになりましたね。」

イワン王子は、自分の秘密をみんな話して聞かせました。その老ばれ婆さんはイワン王子に大へん同情して、ストーブの中から、怖ろしい毒ある草と、小さい玉とを取り出してイワンに云ひました。

「これからの廣い原へ行つて、火をたきつけ、その中へこの毒ある草を入れるのですよ。よくおききなさい。草を入れたら風上に立つて、その草から立ちのぼる煙を、大男の方へ吹きおくるのです。そうすると大男は煙に酔つてぐつすり眠つて終ひます。眠つて終つたらその首を切り落して、それからこの玉を轉

がし、玉のころけて行く後について行きなさい。そうしたらこの玉は、不老美人の女王様のお出でになる所へ案内します。女王様は九日の間所々方々お歩きなさいまして、十日目に宮殿の中で、他の英勇達と一緒に身體を休めます。けれどあなたは、女王様の所へ近づきには、表門から這入らずに、骨を折つても扉を乗り越して行かねばなりません。そして扉の上へ登つたら、そこに張つてある澤山の小綱に觸らない様に氣をつけなさい。もしそれに觸つて、國中の人を起して終つたら、それこそあなたは、生きては歸れませんよ。扉を無事に乗り越したら、眞直ぐに宮殿の方へ行つて、宮殿の裏の寢室へ行き、その室の戸を極くく〜靜かに開けて、そうして女王様の枕の下から命の水の罫を引き出すのです。がその罫を取り出したら、女王様の美しいお顔に見とれてゐないで大急ぎで歸つて來るのですよ。女王様はあなたには驚く程の美人ですからね。」イワン王子はお婆さんにお禮を云つて、お婆さんが教へた通りのことをしまし

た。先づ原へ行き火をたきつけ、その中へ毒ある草を入れ、その煙を番人の大男の方へ煽りました。すると大男の眼は段々と細くなり、欠ひをしたり、手足を延ばしたりしてゐたが、とうとう地面の上に轉げて、ぐつすと寢込んで終ひました、それから大男の首を切つて、小さい玉を轉がし、それについて行きました。どこ迄もく〜もついて行くと、遙か緑の森の中に、黄金の宮殿がきら〜と輝いて見えました。すると塵の柱が、宮殿から道に添ふて、もん〜と湧き立つて流れて來ました。その塵の中に、甲や槍がざら〜と光つて、まるで戦争の時の幾十萬の軍隊の突喚のやうな聲音をさせてやつて來るのです。すると玉は道から外れて、他の方へ轉けて行きました。イワン王子もそれについて道から外れました。そして藪の中へ入り、その中から向ふを見ると、不老美人の女王様がこちらへ來る所でした。女王様は多勢の軍人達を相手に、緑の原の上でいろ〜と遊び事をしてゐるのでした。この軍隊は皆女ばかりで成り立つてゐるのでした。けれ

どもその中でとり分け美しいのは、不老美人の女王様でした。女王様は牧場の真中へ天幕を張つて、九日の間、多勢の女共と、いろ／＼の樂しみ事に心を喜ばせてゐるのでした。

イワン王子は、餓えた狼のやうに、藪の中から女王様を見つめてゐました。王子は女王様から眼を離すことが出来ません。いくら見ても見ても見倦きないといふ風でした。そして十日目に、皆女王様の黄金造りの宮殿の中へ入つて眠つて終ひました。そこでいよいよイワン王子は、力一杯馬を驅り立て、扉を來り越え、宮殿のお庭へ入りました。そして馬を杭につなぎ、盜賊のやうに、そ／＼と宮殿の寢室へ近づき、越毛の床が敷いてある寢室へ入りました。不老美人の女王様は、美しい髪の毛を室一杯に散らして、神様の様に靜かに寢つて居りました。イワン王子は女子様の枕の下から命の水の入つた罈を引き出し、一目散に逃げ去らふとしましたが、女王様が餘り美しいので、王子の若い心は堪らなくなり、思

はず知らず女王様の上に寄り掛つて、蜜よりも甘い接吻を、つゞけざまに三度程しました。それから王子は、女王様の寢室を出で大急ぎで馬に打ち乗り、扉を乗り越した時に、女王様は目を覺えました。そして女王様は早速、速い牝馬に打ち乗り、イワン王子の後を追ひ掛けました。こちらのイワン王子は、絹の手綱を引つ張り、鞭をあて、一散に馬を走らせました。すると馬は人の聲を出して王子に申しました。

「どうしてそんなにわたしを打つのですか、王子様、空飛ぶ鴉でも、森を走る獣でも、女王様の牝馬から逃げることは出来ません。女王様の牝馬は、どんな川

馬が、これを言つて終ふか終はないうちに、女王様は、イワン王子に追ひついて、大刀を引き抜き、きらりと閃かしたかと思ふと、王子の胸元深く刺し込みました。王子は血みどろになつて、眞逆様に馬から落ち、兩目は堅く閉ぢ、眞赤な

血潮は、四邊一面に迸り出しました。不老美人の女王様は、例れた王子の側へ来て凝と見つめてゐると、急に悲しい涙が胸一杯に湧いて来ました。女王様はこんな美しい少年は世界中何處を探してもゐないと思つたからであります。そこで女王様は白い手を延べて、王子の傷の所を、命の水で洗つてやりました。すると直ぐに傷は直り、イワン王子は、本の奇麗な身體となつて、元氣よく起き上りました。

「あなたは、わたしを妻にして下さいませんか。」

と女王様は、イワン王子に訊きました。

「それは、わたしも望む所です女王様。」

とイワン王子は答へました。

「それでは、あなたはこのまゝ、お國へお歸りになつて下さい。そして今から三年の間、わたしを忘れないであつて下されば、わたしはあなたの妻になります。」そこで許婚同士は別れを告げて、各々異つた方へと行きました。イワン王子は

長い間歩きました。途中ではいろいろなものを見ました。そして或る林の中の、黄金の柱の天幕の張つてある所へ着きました。その天幕の傍には、二頭の立派な馬が、白い夏小麦を食べたり、蜜糖水を飲んだりしてゐました。天幕の中にはイワン王子の二人の兄達が、飲んだり、食つたりしながら、いろいろの樂み事をしてゐました。二人の兄は、入つて来た弟のイワンを見て訊きました。

「どうだ。お父さんにやる命の水は見つかつたかね。」

「見つけて来たとも。」

とイワン王子は簡単に答へました。秘密をみんな話して終つたら、どんなことになるか知れぬと思つたからであります。二人の兄は弟に御馳走を食べさせ御酒を飲ませて、充分酔はしてから、命の水の入つた罐を、弟の懐から引き出し、弟を谷底へなげ落して終ひました。イワン王子はごろ／＼と轉げ落ちて、とうとう地下の國へ落ちて行きました。

「ひやー、大變なことをした。とり返しをつかない失敗をして終つた。僕は、もう、どつちへ行つて良いか方角も知れなくなつた。」

とイワン王子は一人言を云ひました。そして王子は、地下の國をあつちこつちと歩き廻りました。すると段々と暗くなつて、まるで夜のやうになりました。すると急に、明るい開けた海邊へ出ました。海邊には、圓い塔のやうなお城と、小さい小屋が立つてゐました、イワン王子は、先づ納屋の中へ飛び入り、納屋から小屋へ入つて、そこで神様にお祈りを捧げ、それから寝りにつかうとしますと、その小屋の中には、灰色の顔をした皺だらけのよぼよぼの婆さんが坐つて居りました。

「あたた、そこへおやすみですか、まあ良くお出でになりました。だが何の御用で茲へお出でになりましたね。」

とお婆さんは王子に訊きました。

「お婆さんはそんなに年を取つてゐる癖に、わけが判らないね。何よりも先きに僕に御飯を食へさせて呉れ。それから少し寝さして呉れ。それからなら何でもお訊きなさいよ。」

そこでお婆さんは、イワン王子に御飯を食へさせ、一眠りさせてから、いろいろと尋ねました。イワン王子は、お婆さんに話して聞かせました。

「僕は、遠い國の不老美人の女王様の所へお客となつて行つたのです。そしていま父さんのアフロン王様の所へ歸る所だが、途中で道に迷つて、こんな所へ来て終つたのだよ。どうぞお婆さん、僕の家へ歸る道を教へて呉れないか。」

「わしは一向に存じませんよ王子様、わしは茲に九十年の間住んで居りますが、未だアフロン様といふお名さへ聞いたこともございません。だがね。今晚は安心しておやすみなさいね。明日になるとわたしの召し使ひ共に道案内をさせませう。他分召し使ひ共の中で一人は道を知つてゐるでせうから。」

翌る朝、イワン王子は早く起きて顔を洗つてからお婆さんの後について、お城のバルコニーへ上りました。お婆さんは、そこで、鋭い聲を出して呼びました。「さあ、海に泳いでゐる魚共も、地を匍つてゐる蟲共も、わたしの大事な召し使ひ達は、みな茲へ集つて来い。」

すると直ぐに、海の水は波立ち、小さい魚も大きい魚も集まり、地を匍ふ蟲共も皆集つて来ました。そして皆、海邊の砂の上に集合しました。

「お前達の中で、アフロン王様は、この世界の何處にお住みになつてゐるかそれを知つてゐるものが有るか。それからその王様のお國へ行くには、どつちへ行つたら良いかそれを知つてゐる者があるかい。」

魚共も蟲共も、それには答へることが出来ませんでした。

「私達は、そんなお方を見たことも、聞いたこともございません。」
それでお婆さんは、そこを去つて、他へ行つて又叫びました。

「さあ、わたしの大切な召し使ひ共よ、森に住む獸ども、空を飛ぶ鳥共も、皆な茲へ集まつて来い。」

すると森の獸は、後から後から集まり来り空の鳥共は、次ぎ／＼と飛び下りて来ました。そこでお婆さんは、アフロン王様のことを訊きましたら、皆一聲に答へました。

「わたくし達は、だれも、そんなお方を聞いたことも見たこともございません。」
それでお婆さんは、王子に云ひました。

「王子様、もう訊くものもなくなりました。召し使ひ達には、皆訊いて終つたのでございます。」

お婆さんと王子は、小屋へ歸らうとすると、空中に羽ばたきの音や啼く聲がして、モーゴルといふ鳥が飛んで来ました。その鳥は、羽から太陽のやうな光りを出して、小屋の近邊を明るく照すのでした。

「お前は、今迄何處にゐたか。なせこんな遅く来たのだえ。」とお婆さんは叫びました。

「私は、遠い〜世界の果てにあるアフロン王様の國へ飛んで行つて来たのでございます。」

「さうか。それならば許して上げやう。丁度私はその國を訊きたいと思つてゐた所だからね。それではこれから、眞面目で立派に、わたしの使ひをして呉れ。といふのは、茲においでになるイワン王子様を、アフロン王様の所迄連れて行つて貰ひたいのだよ。」

「はい、承知いたしました。わたしは喜んで王子達をお連れ申しませう。それには、あなたがお持ちになつてゐる食物を皆戴きたいのでございます。これからアフロン王様の國まで飛んで行くには、三年間もかゝるのでございます。」

「そうかい、そんならお前の欲しいだけ持つて行くが良いよ。」

それからお婆さんは、三年間の旅の仕度を造りました。そして鳥の背には水の入つた大樽を乗せ、その頭の上には食物を一杯入れた大籠を乗せ、その足には、鐵の棒を持たせました。それからお婆さんは、イワン王子に云ひました。

「あなたが、此のモーゴル鳥の背に乗つて行く間に、モーゴルが、首を後ろに向けて、あなたを見た時には、直ぐに棒を籠の中へ入れて、肉の一片を刺して、モゴルに食べさせてやるのですよ。」

「わかりました。どうも有り難う。」

とイワン王子はお婆さんにお禮を云つて、鳥の背に乘りました。鳥は王子を乗せると、直ぐに立ち上り、旋風のように空中へ飛び上がりました。鳥は長い間、遠く遠く飛んで行きました。そして時々首を後ろに向けては、王子に肉を食べさせて貰ひました。とうとう籠の食物がなくなり掛けたので、王子はモーゴル鳥に申しました。

「ねモゴルさん。もう食べるものが少ししか残つてゐませんよ。だから一寸地上に下りて下さい。僕がいろんな食物を籠一杯に拾ひ集めますから。」
するとモゴル鳥は云ひました。

「イワン王子さん。あなたは氣が違つたのですか。この下は、眞暗なもの凄、そして泥深いじめじめした深い森でございますよ。一度下りたら、二度と飛び上つて、世界の果て迄飛んでは行けなくなりますよ。」

そこで王子は仕方なく、籠の食物を皆な出して鳥に食べさせて終ひ、籠も水樽も下へ放つて終ひました。けれどもモゴル鳥は尙も飛びつけてゐました。そして又食物を呉れと首を後ろへ向けました。イワン王子は如何したら良いのでせうか。とうとう王子は、自分の足の脰を切り取つて、それを棒の先へ刺し、モゴルに食はせました。モゴルはそれを一呑みにしました。やがて鳥は、緑の牧場の美しい花が一杯に咲き亂れてゐる、なめらかな草の上に下りました。王子が、鳥



「ねモゴルさん。もう食べるものが少ししか残つてゐませんよ。だから一寸地上に下りて下さい。僕がいろんな食物を籠一杯に拾ひ集めますから。」

するとモゴル鳥は云ひました。

「イヴン王子さん。あなたは氣が違つたのですか。この下は、眞暗なもの凄、そして泥深いじめじめした深い森でございますよ。一度下りたら、二度と飛び上つて、世界の果て迄飛んでは行けなくなりますよ。」

そこで王子は仕方なく、籠の食物を皆な出して鳥に食べさせて終ひ、籠も水樽も下へ放つて終ひました。けれどもモゴル鳥は尙も飛びつ付けてゐました。そして又食物を呉れと首を後ろへ向けました。イヴン王子は如何したら良いのでせうか。とうとう王子は、自分の足の腓を切り取つて、それを棒の先へ刺し、モゴルに食べせました。モゴルはそれを一呑みにしました。やがて鳥は、緑の牧場の美しい花が一杯に咲き亂れてゐる、なめらかな草の上に下りました。王子が、鳥



の背から下りると、モゴルは先刻呑んだ王子の腓を再び吐き出して、それを唾
でイワン王子の足へ元の通りにつけつきました。それからイワン王子は元氣よく
歩きました。そして、父さんのアフロン王様の町へ行つて見ると、町の中には、
いま何事が起つてゐる所でした。多くの人々が群つて、町のあちこちを歩き廻り
王様の家來達は、夢中になつて走り歩き、出逢つた人毎に何かを訊いては、狂氣
のやうになつてゐるのでした。そこでイワン王子は、町の一人に尋ねました。

「町中のこの騒ぎは、一體どうしたのです？」
その人は王子に答へました。

「不老美人の女王様が、いま私達の國へ押し寄せて來たのです。四十艘の舟にど
れにも一杯の軍人を乗せて來て、私達のアフロン王様に、王子のイワン様を
渡せと迫つてゐるのです。その王子様は、今から三年前に、女王様の唇に、蜜
よりも甘い接吻をして、女王様のお寢りを覺ましたといふです。そしてもしイ

ワン王子様を渡さなかつたら鐵砲や劔を以て、私達の國を亡ぼして終ふといふので有ります。」

「さうか。それは丁度良い所へ歸つて來た。僕も、女王様に逢ひたくてゐた所だ。」と云つて、イワン王子は直ぐに小舟に乗り、女王様の舟へ渡りました。そして女王様とイワン王子は相抱き、慈しみ合ひました。それから神様の教會で新婚の冠を戴き、アフロン王様のお前へ出で總ての様子を申し上げました。アフロン王様は、イワン王子の二人の兄等をお怒りになつて、財産を取り上げて宮殿から追ひ出しました。そうして、三男のイワン王子と女王様と三人で、幸福に暮したといふことでございます。(終り)

ペルリオカ

むかしむかし或る所にお爺さんとお婆さんが住んで居りました。そして兩親の

ない孫が二人ありました。どちらも可愛い柔い綺麗な子供なので、お爺さんもお婆さんも可愛いくて仕様がありませんでした。或る日お爺さんは二人の孫を連れて、畑の豌豆を見に行きました。行つて見ると豌豆は元氣よく育つて、もう實のり掛けてゐました。お爺さんも孫さん達も大へん喜びました。そこでお爺さんは孫達に云ひました。

「ねえ。こんな良い豌豆は何處へ行つても無いだらう。いまにこの豌豆で、酸い肉羹や、豆菓子をこしらいて食べさせるよ。」

次の朝お爺さんは、長女の孫娘に云ひつけて豌豆畑の番をさせることにしました。

「豌豆畑へ行つて、雀の來ない様に良く番をしてお出でよ。」

孫娘は豆畑の側に坐つて、枯枝を振り廻しながら、

「ホラー、雀の奴等、又お爺さんの豆をお腹一杯食べたな。」

と止めなしに怒鳴つてゐました。すると間もなく森の中から、がら／＼とこゝろといふ音鳴りがして、やがて、ベルリオカといふ大きな身體の一つ目、鈎鼻の、毛髪は針の様に突つ立ち、鬚髭は三尺もあり、頭には豚の鬣を乗せ、一本足に木の長靴をはき、拐杖に寄り掛り、びつこを引き、白い齒をむき出して、にた／＼と笑ひながら出て来ました。そして可愛い小さな孫娘の所へ近寄りさま、孫娘の襟元をつかまいて、近くの湖の後ろへ引きずつて行きました。お爺さんは家で、いくら待つても待つても孫娘が歸つて来ないので、弟の孫息子を見にやりました。すると又ベルリオカが出て来て、息子を連れて行つて終ひました。お爺さんは又も、いつ迄も／＼も待つてゐましたが、二人とも歸つて来ないので、とうとうお婆さんに云ひました。

「なんと孫等は、遅いぢやないか。二人は吃度、そこらを走り廻つて遊んでゐるのだよ。でなけりや、外の子供達と一緒に掠鳥を追ひ廻つて遊んでゐるのだよ。」

そんなことをしてゐる間に、雀が来て、豌豆をみんな食つて終ふのにな、仕様のない奴等だ。早く迎ひに行つて、良く云ひきかして下さいよ。」

お婆さんは爐邊から起き上り、隅から杖を取り上げて、出掛けて行きました。お婆さんが畑へ行くと又、直きにベルリオカの怪物が出て来て、大聲で叫びました。

「何用あつて、茲へ来たのだ老ばれ婆。お前は豌豆を番に來たのか。そんならはお前を、豆畑の中へ、いつ迄も／＼立たして置くぞ。」

さう云つて、ベルリオカは、持つてゐる杖を以てお婆さんを散々に打ち叩き、お婆さんの氣を遠くして、とうとう死んだ様にして、倒して終ひました。

お爺さんは、又も孫等とお婆さんを待ち暮しましたが、どうしても歸つて来ません。そこでお爺さんは、ひとりで、ぶつ／＼小言を云ひ始めました。

「何處をうろつき廻つてゐるのだらうな。自分の妻に、良いことをして貰はうと

は思ふなといふが、全くのことだよ。」

そこでお爺さんは、こん度は仕方なし、自分で豆畑へ行つて見ました。するとお婆さんは、見わけがつかない位に身體中を打たれて倒れておりました。そして孫達の影も形も見えませんでした。お爺さんは驚き叫んで、お婆さんを抱き起こしやつとの事で家まで運び込み、冷たい水で打たれた所を少しづつ冷やしました。やがてお婆さんは目を開けて、自分を打ちのめしたり、孫達を連れ去つて終つた怖い怪物のことを、お爺さんに話して聞かせました。お爺さんはベルリオカを、非常に怒つて怒鳴りました。

「餘り人を馬鹿にするな。少し待てよベルリオカ、俺達も手は持つてゐるぞ、貴様の顎髭に、自分の身體を捲かれない様にしろよ。貴様は、貴様の手で、この悪さをしたのだから、同じその手で、償ひをせねばならぬぞ。」

お婆さんも、お爺さんの出て行くのを止めなかつたので、お爺さんは鐵の杖を

持つて、ベルリオカを探しに出掛けました。

お爺さんは漸くのこととて、或る小さな池の所まで來ました。池の中には尾を切られた鴨が泳いで居りました。その鴨はお爺さんを見て云ひました。

「カツカツカツ。御機嫌良うお爺さん。わたしは随分長い間お爺さんを待つて居りましたよ。」

「いや御機嫌良う鴨さん。してわしを長い間待つてゐた理由は？」

「はい、わたしはお爺さんが、お孫さん達を探しに來ることを知つてゐたからですよ。そして、お爺さんは、ベルリオカの怪物を責めつけやうと思つてゐらつしやるのでせう。」

「それはそうだが。お前さんは、あの怪物をどうして知つてゐるのだね。」

「カツカツカツ。わたしは、あいつを良く知つてゐる譯があるのです。あいつは、わたしの尾を切り取つて終つたのですよ。」

「それでは、お前さんは、ベルリオカの住家を知つてゐるね。」

「カツ／＼、え、知つてゐますとも。わたしは、御覽の通りの小さい小鳥に過ぎませんけれど、私の尾は、ベルリオカなどよりはすつと價值のあるものですからね。」

「それでは、わしの先に立つて道案内して呉れないか。お前さんは、尾は小さくても、頭は立派な智慧を持つてゐますからね。」

それから鴨は水から出て来て、堤の上に登りよた／＼と歩き出しました。

そしてお爺さんと鴨は一緒に行きました。すると道端に小さな繩切れが落ちてゐました。その繩切れが、鴨に言葉を掛けました。

「今日は利口な叔母さん。」

「こんにちは、小繩さん。」

「あなたは、何處に住んでゐらつしやるの。そして今からどちらへお出でになる

の。」

「わたしは、或る所に住んでゐますよ。わたしはね、今からベルリオカを責めに行くのです。あいつは、わたしのお婆さんを散々に打ちのめした上に、二人の可愛い孫さんを何處かへ連れて行つて終つたのですよ。その孫さん達は、ほんとに美しい可愛い子供だつたのです。」

「わたしも加勢しますから、一緒に連れて行つて下さいね。」

お爺さんは、胸の中で、

「これは連れて行つた方が良かったらう。こいつは、ベルリオカの首を括るかも知れない。」

と思つたので小繩に向つて云ひました。

「お前さんも道を知つてゐるなら、一緒にお出でなさい。」

小繩は、お爺さんと鴨の後から蛇のやうに、のろ／＼とついて行きました。

小繩と鴨とお爺さんが一緒に行くと、こん度は小さな水車が道端に轉がつてゐました。水車は鴨に云ひきました。

「今日は、鴨の叔母さん。」

「今日は小さい水車さん。」

「あなたは何處にお住みになつてゐらつしやるのです。そして今からどちらへお出でになるのです。」

「わたしは或る所に住んでゐますがね、今からベルリオカを懲らしめに行く所です。あいつは、わたしのお婆さんを散々に打ちのめした上に、二人の孫さん達迄連れて行つて終つたのですよ。それは奇麗な孫さんだつたのですよ。」

「私も手傳つて上げますから、一緒につれて行つて下さい。」

お爺さんは、この水車も何かの役に立つだらうと思つたので、一緒にお出でと水車に云ひました。水車はからだを起し、柄を地について、がた／＼と皆の後に

ついでに行きました。

尙進んで行くと、こん度は、どん栗が道端に轉がつて居りました。どん栗は、黄ろい聲を出して、鴨に云ひました。

「今日は、長鼻の叔母さん。」

「こんにちは、かたやのどんぐりさん。」

「お揃へで、どちらへお越しですか。」

「ベルリオカを、ごらしめに行くのだよ。ベルリオカの事を知つてゐるかね。」

「知つて居ります。わたしも加勢しますから一緒に連れて行つて下さい。」

「だけど、お前さんにも加勢が出来ますかね。」

お爺さんは「一緒に連れて行つたら、何かに役に立つだらうと思つたので、どんぐりに云ひました。

「まあ良いから、後から轉げてお出でよ。」

どんぐりは、皆の先に立つて、びよん／＼と跋ねて行くので、その様子が滑稽でした。

皆揃つて、或るこんもりと繁つた森林につきました。この森林は大へん物淋しい怖い森でした。森の中には、たつた一軒の小さい家が立つて居りました。四邊には家もなくて、この家は、ほんとの一軒家でした。小家の爐には、火も燃えてゐません。たゞ肉羹が一人で立つてゐました。どん栗は肉羹と知り合ひなので、直きにそこへ飛んで行きました。小繩は敷居の上に長々と寝そべり。水車は腰掛けの上に着り、鴨は爐邊に坐り、お爺さんは家の隅に立つてゐました。すると突然森の中にがら／＼／＼といふ音がして、やがて、ベルリオカが、一本足に木の長靴をはき、拐杖にもたれ、口を耳まで開けて、た／＼と笑ひながら現はれて來ました。ベルリオカは、小家の中へ入り、薪を床の上に放り出し、爐に火をたきつけました。すると肉羹の中に坐つてゐたどん栗は、唄を歌ひ始めました。

「ピー／＼／＼。のし等は、ベルリオカを攻めて來た！」

ベルリオカは眞赤になつて怒り出し、肉羹の入つてある鍋の柄をつかみました。すると、鍋の柄は折れて、肉羹は、そこから中一杯に散らばりました。どん栗は、鍋から飛び上りさま、ベルリオカの一つ目を力限りはちいて、見えない様にして終ひました。ベルリオカは叶びながらあばれ廻り、手探りで、出口を見つけやうとしました。けれど出口はどこにあるだらうか。どうしても見つけることが出来ません。そこへ小繩がベルリオカの足に、からみつき、敷居の上に倒しました。水車はベルリオカの頭の上に腰掛けを放つてました。それからお爺さんは隅から飛び出し、鐵の杖で力限り打ち叩き、鴨は聲限り叫びました。

「カツ／＼／＼、ベルリオカを攻めつけろ、ベルリオカをやつつけろ。」

ベルリオカは、どんなに怒つても、どんなに亂暴しても、どうにもなりません。とうとうお爺さんは、鐵の杖で、ベルリオカを叩き殺して終ひました。

それから小家をこはして地下の室を開きました。そして地下室から二人の孫を連れ出しました。それからベルリオカの寶物もみんな家へ持つて歸りました。それからお爺さんは、お婆さんと、可愛い孫達と一緒に幸福に暮し、豌豆を作つては、それを收穫れて、みんなで仲良く食べたといふことです。(終り)

蛙 姫

ある國に王様と、后様とが住んで居りました。二人の間には三人の息子がございまして、三人とも、ことばにも筆にもつくせない、美はしい勇ましい青年でした。そして三人ともお嫁さんが有りませんでした。末子の名はイワン王子と云ひました。或る日王様は、三人の王子達に向つて云ひました。

「可愛い子供達よ、お前達は良く張つた弓を持ち、三人とも異つた方向へ向いて弓を射て、その矢が落ちた所にゐる娘を、お前達の花嫁にするが良い。」

一番大きい兄の射た矢は、貴族の御殿の、女達のある室の前へ落ちました。二男の射た矢は、商人の家のバルコニーの上に刺りました。そのバルコニーの前には、若い美しい商人の娘が立つてゐました。末子の射た矢は、泥深い沼の中に、クツクツと鳴いてゐる蛙の傍へ落ちました。そこで末子のイワン王子は、お父さんに申しました。

「お父さん。あのクツクツと鳴いてゐる蛙がわたしのお嫁になるのですか。蛙は人間ぢや有りませんよ。」

「でも、それがお前の運なのだから仕方がない。蛙をお嫁さんに貰ふさ。」とお父さんは云ふのでした。そこで王子達は皆結婚しました。長男は貴族の娘と、二男は商人の娘と、そして末子のイワンは、クツクツと鳴く蛙と夫婦になりました。すると王様は、王子達を呼び寄せて云ひ渡しました。

「明日の朝は、お前達の嫁さん達に、わしが食べる柔かい白パンを造つて貰はう

な。」

末子のイワン王子は心配しながら家へ歸りました。そして普段の活潑な頭も、肩の下へうなだれておりました。それを見た奥さんの蛙は、

「クツクツ。イワン王子様、どうしてそんなに沈んでおらつしやるのです。あなたはお父さんから、何か厭なことでも聞かされたの。」

とイワン王子に訊きました。

「だつて心配せずにはゐられないぢやないか。お父さんがね。明日の朝食食べるのに、柔らかい白パンを、お前に造れといふのだもの。」

「そんなことに御心配なさらない方が宜しうございます。あなたは、今夜は安心しておやすみなさいね。明日の朝になれば、解りますから。」

蛙は、王子を寝りにつかせてから、蛙の皮を脱ぎ棄て、ワシリサ、プレミアムドラヤといふ女に變りました。そして美しいパルコニーに上つて、黄ろい聲を出して叫

ました。

「乳母達や、早く茲へ来て呉れよ。そして、わたしがお父さんの所でいつも食べてゐた様な柔らかい白パンを造つてお呉れよ。」

次の朝イワン王子は起きて見ると、蛙は、とつくにパンを造つて置きました。

そのパンは實においしい立派なもので、だれにも思ひ及ばない程のものでした。そのパンは、種々な彫りもので飾つてあり、その両面には、溝や堀まで細かに入れている、都の地圖が描いてありました。王様は、イワン王子のパンを一番良く褒めました。そして又三人の王子達に云ひつけました。

「お前達の嫁さん達は、わしの絨氈を、一夜のうちに織つて貰いたいものだ。」

イワン王子は、家へ歸つたが、悲し相に頭をうなだれておりました。

「クツクツ、イワン王子様、どうして、そんなに悲しんでおらつしやるの。あなたは、お父さんから何が辛いことを云ひつかつたの。」

「でも、悲しみますにわられないんだよ。私のお父さんはお前に云ひつけて、たつた一夜の中に、絨氈を織らせよといふのだから。」

「御心配は有りませんよ。今夜は安心してお休みなさい。明日の朝になれば何もかも判りますから。」

蛙はイワン王子を寝かしてから蛙の皮を脱ぎ棄て、ワシリサ、プレムドラヤといふ美しい女に變りました。そして美しいバルコニーに出で、鋭い聲を出して呼びました。

「乳母達や〜、茲へ来て下さい。わたしがお父さんの所で、いつでも坐つてゐたと同じ絨氈を直ぐに織つて呉れよ。」

それを云ふと直ぐに絨氈は出来上りました。朝になり、イワン王子が起きた頃は、絨氈はちやんと織つてありました。その絨氈は、普通の人々の想像も出来な程の立派なもので、金や銀で飾つてあり、さら〜と輝く刺繍がしてあります。

た。王様はイワン王子の絨氈を大へんお褒めになりました。それから王様は、又も別な命令をお下しになりました。それは、王様は、三人の王子の花嫁達を見たから明日の朝、三人とも花嫁を連れて、王様の所へ集るやうにといふのでありました。イワン王子は、その日も頭を兩肩の間へ埋めて、沈み切つて家へ歸りました。

「クツ〜、イワン王子様、何をそんなに沈んでゐらつしやるの。亦お父さんから辛いことを云ひつけられたのですか。」

心配せずにはゐられないよ。お父さんがね、明日の朝お前を連れて来いといふんだよ。どうして、お前を、人の前などに出すことが出来るものか。」

「御心配はいりません。イワン王子様。明日の朝はね、あなたおひとりでお父さんの所へゐらつしやいね。わたしは後から行きます。あなたが先にゐらしやつて、やがて、がら〜とどん〜といふ音がしたらあなたは、お父さんに向つて、

「いまわたしの可愛い小さな蛙が、籠に入つて来ました」とお云ひなさい。」

次の朝、兄達二人は、立派に着飾り、きら／＼しく装ひ立てた花嫁を連れて王様の御機嫌伺ひに出ました。兄達夫婦はひとりしよんばりと来た弟のイワン王子を見て笑つて言ひました。

「どうしたんだね、お前さんは、何故花嫁さんを連れないうで来たのだね。臺所の着物でも被せて連れて来たら良いぢやないか。お前さんは、あんな美しい花嫁さんを何處から探して来たね……、大方、そこらの泥沼の中からも探し出して来たのだらうハ……。」

すると突然、がら／＼どん／＼といふ怖ろしい音がして、宮殿がすん／＼とゆるぎ出しました。集つてゐた者は皆顛ひ上りました。そして、だれがそんな音をさしたかは知りませんでした。しかしイワン王子だけは落ちつき拂つて皆に申しました。

「皆さん、怖れることはありません。わたしの小さい蛙が籠に入つて来た迄のこととでございますよ。」

すると、六頭立ての黄金の馬車が、王様のバルコニーの階段の所へ近づいて来ました。その馬車の中からは、ワシリサ、プレムドラヤが現はれ出ました。そのお姫様は、だれにも思ひもつかない程の、物語りの中に出て来るやうな美しい女でした。イワン王子はそのお姫様の手を取つて刺繍したテーブル掛けの掛つた食卓の所へ腰掛けさせました。皆も一緒に、お酒を飲み、御馳走を食べて楽しみました。ワシリサ、プレムドラヤは、お酒を飲んで残つたお酒は左の袖の中へ注ぎました。ロース焙きにした鵲の鳥を食べて、その骨は右の袖の中へ隠しました。二人の兄達の花嫁達も、それを見て真似しました。やがて、ワシリサ、プレムドラヤは立つて、イワン王子とダンスを始めました。左の袖をさつ／＼ひるがいせば、湖が現はれ、右の袖をさつ／＼振れば鵲の鳥が出て、湖の上に浮びました。王様も、

外の人達も皆驚きました。こん度は兄達の花嫁達がダンスを始めました。左の袖を上げると皆の人に水が掛りました。右の袖を動かすと、骨が飛び出して、王様の目の中へ入りました。王様は非常にお怒りになつて、罰を與へて、兄達夫婦を追ひ出して終ひました。

すると或る日のことでありました。イワン王子は家を出るとそこで蛙の皮を見つめました。王子は、それを、どん／＼燃えてゐる火の中へ入れて燃して終ひました、丁度そこへワシリサ、プレムドラヤが外から歸つて來ました。すると自分の蛙の皮がなくなつてゐるので、大へん困つて泣き出しました。そして王子に云ひました。

「おう、あなたは飛んだことをなさいました。いま少しの間、待つてゐて下さつたら、わたしはいつ迄もあなたのもとにゐられたのに……、もういまは、お別れせねばなりません。わたしは、ずつと／＼遠い國の「不死の人」の家に住ん

で居ります。どうぞそこへ訪ねて來て下さい。」

さう云つて、王子の花嫁は白い鶴の鳥に變つて、窓から飛び去つて終ひました。イワン王子は非常に泣き悲しみ、四方の神様にお祈りを捧げて、それから花嫁を探しに出掛けました。そして、諸々方々歩き廻つた末或る所で、一人のよぼよぼの爺さんに出逢ひました。その爺さんは、イワン王子に云ひました。

「今日は若さん、あなたは、何を探してゐるのですね。そしてこれからどちらへ行くおつもりですか。」

イワン王子は、自分の困つてゐる事柄を皆な話して聞かせました。

「さうですか。イワン王子様。あなたは何故にその蛙の皮を火に焼いて終つたのです、二度とあなたはそれを造ることは出来ませんよ。ワシリサ、プレムドラヤ様は、お父さんより利口に生れたものですから、それでお父さんの御機嫌に觸つて、この三年間は、蛙にされて終つたのです。この小さい玉を上げますか

ら、玉の轉げて行く後について行つて御覽なさい。」

イワン王子は、お爺さんにお禮を言つて、玉の後について行きました。廣い原まで行くと一疋の熊に出逢ひました。

「一つ、この熊を殺してやらうか。」

とイワン王子は心に思ひました。すると熊は王子に首を下げてお願ひしました。「どうぞ命だけは助けて下さい。これでも何かのお役に立つでせうから。」

イワン王子は、更らに進んで行くと、後ろの方から鳴がよたくとやつて來ました。イワン王子は、弓を取り上げて、鳴を射殺さうとしました。すると鳴は人間の聲を出して、王子に挨拶しました。

「どうぞ命だけは、助けて下さい。何かのお役に立ちますから。」

王子は鳴に同情して助けてやりました。又進んで行くと、野兎がひよつこりとして出て來ました。イワン王子は又も弓を取り上げ、狙ひを定めて射やうとすると、

野兎は人間の聲を出してお願ひしました。

「どうぞ命だけは助けて下さい。私も何かのお役に立ちませうから。」

イワン王子は、それも可愛想と思つて、助けてやりました。こん度は海岸へ出ました。すると波打ち際に一匹の梭魚が居りました。

「おオイワン王子様、私を可愛想と思ひ下さつて、海の中へ逃れさして下さい。と梭魚は、王子に云ひました。イワン王子は梭魚を海の中へ放してやり、それから海岸に添ふて歩いて行きました。小さい玉は、あつちこつちと轉げ廻つた末或る汚ない小屋へ着きました。小屋は鶏の足のやうなものに立つてゐて、ぐるぐる廻つて居りました。イワン王子は、小屋に向つて叫びました。

「小家よ、海を背にして、僕の方へ向きなさい。」

すると小屋は、海を背にし、王子の方へ向きました。王子が小屋の中へ入ると、骨ばかりに瘦せた足を延ばして、バーバー、ヤーガーが九つの煉瓦を並べた爐の

側に、白い齒をむき出してゐました。」

「今日は若さん。わたしの所へ、何の御用でございます。」

とパーパー、ヤーガーは王子に訊きました。

「お婆さん、僕を若さんと呼ぶのは良いが、それよりも先に御飯を御馳走して呉れませんか。それから少し寝させて下さい。そうしてからなら、何でもお訊きなさい。」

パーパー、ヤーガーは、イワン王子に御飯を食べさせ、それから床を取つて眠らせました。やがて王子が目覺てからいろ／＼と訊きました。イワン王子は、花嫁のワシリサ、プレムドヤナを探してゐるのだといふことを話して聞かせました。「それならば良く知つてゐますよ。その女はいま「不死の人」家に住んで居ります。しかしそこへ近づくには容易なことではございません。又「不死の人」を攻めるのも困難でございます。が、その男を殺すには、只一本の針があれば

良いのです。がその針は野兎の腹の中であり、その野兎は或る箱の中へ入つて、或る高い樹の頂上に乗つて居ります。そして「不死の人」の番人が、その樹の下に、目を放さずに番をして居るのですよ。」

パーパー、ヤーガーは、その樹の生いてゐる場所を教へて呉れました。イワン王子は、その樹の所まで行きましたが、その箱をどうして取つたら良いか判りませんでした。すると突然に、一匹の熊が出て来て、その樹を根り倒して終ひました。すると箱は樹から落ち、粉々にこぼれ、その中から野兎が飛び出しました。飛び出した兎は、一散に走り出しました。すると、一匹の他の兎が出て来て、その兎を追ひ掛け、とう／＼追ひついて、その兎を引き裂いて終ひました。引き裂くと、その中から鴨が飛び出し、空高く飛んで行きました。と他の鴨がそれを追ひかけ、その鴨を打ち落としました。打ち落された鴨は一つの卵を産みました。その卵は海の中へ轉げこみました。イワン王子は、その卵を取ることが出来ないので、

とうとう泣き出しました。すると突然に一匹の梭魚が泳いで来て、卵をくはいて上つて来ました。王子は喜び勇んで、その卵を割つて、その中から針を取り出しました。その針は、先きが鋭どく尖つてゐました。王子は、その針を「不死の男」に打ちました。「不死の男」は、大へん藻掻き苦しんで、のたうち廻つたが、とうとう死んで終ひました。それからイワン王子は「不死の男」の家に入り、ワシリサ、プレムドヤナを連れ出し、家へ歸りました。その後二人は、長い間、大そう幸福に暮したといふことであります。(終り)

軍人の二人息子

むかしある所に、一人の百姓が居りました。或る時、軍人になつて、戦争に出なければなりません。そして自分の妻とも別れて暮さねばならなくなりました。そこで百姓は、妻と別れる時、妻に向つて云ひました。



とうとう泣き出しました。すると突然に一匹の梭魚が泳いで来て、卵をくはいて上つて来ました。王子は喜び勇んで、その卵を割つて、その中から針を取り出しました。その針は、先きが鋭どく尖つてゐました。王子は、その針を「不死の男」に打ちました。「不死の男」は、大へん藻掻き苦しんで、のたうち廻つたが、とうとう死んで終わりました。それからイワン王子は「不死の男」の家に入り、ワシリサ、プレムドヤナを連れ出し、家へ歸りました。その後二人は、長い間、大そう幸福に、暮したといふことであります。(終り)

軍人の二人息子

むかしある所に、一人の百姓が居りました。或る時、軍人になつて、戦争に出なければなりません。そして自分の妻とも別れて暮さねばならなくなりました。そこで百姓は、妻と別れる時、妻に向つて云ひました。



「妻よ。正直に暮して、近所の皆さんを粗末にしてはいけないよ。又この小さい家も、すたれない様に大事に守つて、俺の歸つて来るのを待つて居れよ。神様の御許しが出たら、御奉公を果たして又此の家へ歸つて来るのだから。そして茲に五十圓のお金を置いて行くが、俺の留守の間に、お前が、男の子か女の子を無事に産んでも、此の金は子供が大きくなる迄納つて置くのですよ。もし生れた子が女だつたら、良く育て、良縁を求めて、立派な花婿さんを貰ふが良い。もし男の子であつたら、その子が大人になつた時に、此の金が何かの役に立つだらうからな。」

さうして百姓は妻と別れて、招集された戦場へと行きました。百姓が家を出てから三ヶ月程たつて、妻は一度に二人の男の子を産みました。妻はこの男の子供達を、「軍人の息子と」呼んでおりました。二人の男の子はどん／＼と育つて行きました。丁度小麦の粉が酸酵する時のやうに、もく／＼と肥つて行くのでした。二

人が十歳になつた時、二人のお母さんは、二人を學校へ上げました。二人の息子は、教つたことを直ぐに覚えて、貴族の息子も、商人の息子も、二人には、比べものにはなりませんでした。どの子供でも、この二人の息子のやうに、高々と本を読んだり、立派に字を書いたり、又先生の問ひに對して、直ぐに答へることは出来ませんでした。そうして軍人の息子達は成人しました。或る時二人は、お母さんに向つて、こんなことを訊きました。

「お母さん、僕達のお父さんは、僕達にお金を残して置いてあるでせう。もしそのお金があるなら、僕達に下さいよ、僕達は今から市場へ行つて、二人で一頭づゝ立派な馬を買つて來るのだから。」

そこでお母さんは五十圓のお金を二つに分けて、二十五圓づゝ二人の息子に呉れてやりました。そしてから云ひきかせました。

「ねお前達、町へ行つたら、逢つた人さんには、良く挨拶をするのですよ。」

「はい、その通りにします。ではお母さん、行つて参ります。」

二人の兄弟は町へ急ぎました。そして馬市場へ行きました。そこには澤山の馬がゐましたが、どれも〜悪い馬ばかりで、買いたい様な馬は一頭も居りませんでした。そこで兄は弟に云ひました。

「あすこの四角の所へ行つて見やうよ。皆さんが走つて行くから、何かあそこにあるんだよ。」

二人はそこへ走つて行き、人だかりの中へ割つて入りました。見ると二頭の牝馬が、鐵の釘絆を打つた柵の柱にしつかりと繋がれてゐました。一本の柱には六本の釘絆が打つてあり、も一つの柱には十二本の釘絆が打つてありました。二頭の牝馬は、鎖をちやら〜と鳴らし、轡を噛み、蹄で地を掘つたりして、元氣よくあばれてゐました。そしてだれも其處へ近づくことは出来ませんでした。

「この馬は二頭でいくらで賣るね。」

と軍人の息子は、馬の持主に訊きました。

「まあ君、近くへ鼻先などを持つて行きなされるなよ。この馬は、君等の馬とは、とんと異ふのだからね。まあ、値段などをおきよにならない方が良いでしょう。」

「僕を何だと思つてゐるんだね。様子に依つたら、この二頭の馬を買つても良いんだよ。だが先づ馬の齒を調べねばならん。」

馬の持主は笑ひながら云ひました。

「御勝手に御覧になるが良いさ。」

そこで兄の方は、六本の釘絆ある柱に繋がれてゐる方の馬へ近づき、弟は十二本の釘絆でつながれてゐる方の馬へ近づきました。それから馬の齡をしらべやうとしたが、どうしてそんなことが出来ませうか。馬は後足でつつ立ち、前足で引き掻き始めました。そこで二人は、膝を上げて、馬の胸先きを突くと、馬は三丈も高く空中へ跳ね返され、そして真逆様にどしんと落ちました。

「何だ、自慢する程でもないぢやないか。こんな馬を喜んで買ふ馬鹿はないよ。」と二人の兄弟は笑ひました。これを見た群衆は一聲に、

「おー、實に強い勇ましい英雄達ぢやないか。」

と驚き叫びました。馬の持主は泣き出さぬばかりでした。二頭の牝馬は、町を走り抜けて廣い荒野の中へ飛び去つて終ひました。だれ一人その馬を追ふものもなく、又つかまいる術を知るものも有りませんでした。軍人の息子達は、馬の持主に申し譯がないので、廣い原へ走つて行き、大きな聲を出して叫んだり、息のつづく限り口笛を吹いて呼んだりしました。すると二頭の馬は、ひとりで走り戻つて、前に繋がれてあつた場所へ、本の通りになやんと立ちました。そこで二人の兄弟は、鐵の鎖で、櫛の柱にしつかりと繋ぎました。それから二人は家へ歸つて行きました。すると、途中で一人の白髯の爺さんに會ひました。二人はお母さんに云はれたことを忘れて終つて、挨拶もせずに行き過ぎました。行き過ぎてから

それを思ひ出した弟は、兄に云ひました。

「やー、飛んだことをして終つた。俺達は今逢つたお爺さんに挨拶をしなかつたね。いまから追ひついて、挨拶をして來やうぢやないか。」

二人はお爺さんに追ひつき、小さい帽子を取つて挨拶をしてから云ひました。

「お爺さん、先刻僕達は、お爺さんに挨拶をせずに行きすぎたから、どうぞ許して下さい。僕達のお母さんがね。道で逢つた人にはだれにでも挨拶をせねばならぬと、厳しく教へて呉れたのです。」

「それは、どうも有り難う。して兄さん達は、これからどちらへお出でになりませぬかね。」

「僕達はね。町の市場へ行つて來たのですよ。僕達は、一頭づゝ良い馬を買はうと思つて行つたのですが、氣に入つた馬は一頭もありませんでしたよ。」

「まあ、そうだつたかえ。それでは、わしが兄さん達の氣に入つた子馬を、一頭

づゝ上げやうと思ふがどうだね。」

「そしたらお爺さん、僕達はいつでも、お爺さんの幸福を神様に祈つてやるよ。」

「宜しい、わしと一緒ににお出でなさいよ。」

白髯のお爺さんは、二人の兄弟を、高い山へ連れて行きました。そして鐵の扉を開き、立派な小馬を二頭引き出して云ひました。

「さあ、この二頭の馬を兄さん達に上げるから、神様にお禮を申して連れ返りなさい。そして、立派に育て上げなさいよ。」

二人はお爺さんにお禮を云つて、てんでに貰つた馬に乗つて家へ走り歸りました。そして、庭の柱に馬をつなぎ、家の中へ入つて行くと、お母さんは二人に訊きました。

「おーお前達、良い馬を買つて來たかね。」

「お母さん、僕達はお金で買つて來たのぢやなくて、良い小馬を只で貰つて來た

よ。」

「その馬はどこにあるの。」

「家の側にゐますよ。」

「そうか。まあそんな所へ置いて、人に連れて行かれて終ふよ。」

「いゝえお母さん。だれにもあの馬を連れて行くことは出来ませんよ。傍へ近寄ることさへ出来ませんから。」

お母さんは外へ出て、馬を見ました。そして涙を流しながら云ひました。

「おー、わたしの可愛い息子達、良い馬を連れて来たね。お前達は、親にも生れ増して利口になつたよ。」

翌る日、二人の息子等は、剣を買ひに町へ行きたいとお母さんにお願ひしました。お母さんは許して呉れました。それから二人は町へ行き刀鍛工の所へ行つて、その主人に云ひました。

「僕達に、剣を二つ造つて呉れませんか。」

「剣はこの通り澤山造つてありますから、兄さん達のために、わざわざ造る迄もないですよ。この中のどれでも、一番お気に入りのものをお取り下さい。」

「いゝえ叔父さん。僕達は、一つ五十貫の重さの剣を二つ欲しいんですよ。」

「兄さん達は何を云つてゐるですね。そんな重い奴をどなたがお使ひになるのですか。どこへ行つたつて、そんな剣は有りやしませんよ。」

二人の兄弟は、如何することも出来ず、がっかりして家へ歸つて行きました。すると途中で、又前に逢つたと同じお爺さんに出逢ひました。お爺さんは、二人にことばを掛けました。

「今日は兄さん達。」

「今日はお爺さん。」

「何處からのお歸りですかえ。」

「町の刀鍛工の所からですよ。ダマスカス製の鋼鐵の劔を二つ欲しかつたのですが、僕達に手ごろなものは有りませんでしたよ。」

「それはお氣の毒なことだ、わしがその劔を一つづゝ呉れてやりませうかね。」

「お爺さん、ほんとにさうして呉れたら、僕達は一生お爺さんの恩を忘れませんよ。」

お爺さんは、二人を高い山へ連れて行き、鐵の扉を開いて、中から立派な劔を二つ取り出しました。兄弟は名々一つづゝ貰つて、お爺さんにお禮を云つて、家へ歸つて來ました。二人の心は喜びで一杯になりました。お母さんは二人に訊きました。

「どうしたね。劔を買つて來ましたか。」

「僕達は、お金でなしに、只で貰つて來ましたよ。」

「その劔は何處に置いてあるね。」

「家の側へ置いときましたよ。」

「盗まれるから、氣をおつけなさいよ。」

「いゝえお母さん、だれにも盗むことは出來ません。大へん重くて、持ち上げることもさへ出來ないものですよ。」

お母さんは庭へ出て、見ました。二つの重い立派な劔は、家の壁に立て掛けてありました。そして小さい家は劔の重さで、倒れさうでした。お母さんは涙を流しながら云ひました。

「おーわたしの可愛い息子達よ、お前達は親にも生れまして、利口になつたよ。」

次の朝、軍人の息子達は、お爺さんから貰つた強い馬に乗り、立派な劔を持つて、神様にお祈りをしてから、お母さんに別れを告げて申しました。

「お母さん御機嫌よう、これから僕達は、長い旅に出ます。」

「お母さんは、お前達が無事なやうにと、毎日祈つて居りますよ。だから安心し

て、お出でなさい。諸々方々歩いて、広い世界を良く見物してゐらつしやい。だが無暗と人を怒つたり、又悪い事に組したりしてなりませんよ。」

「大丈夫ですお母さん。僕は、『ものを食へる時は、口笛などを吹くな。ものを噛んでゐる時は、それを呑み込むな』(一事をするのに二心でするな)といふ格言を、ふたりの戒めとしてゐるのですから。」

それから立派な二人の青年は、各々馬に打ち乗つて、長い旅にと出掛けました。所々方々を歩き廻つた末、遂に二人は、或る四辻へ出ました。そこには二本の柱が立つてゐて、一本の柱には。

「これより右へ行く者は王様となるを得。」

と書いてありました。他の柱には。

「これより左へ行く者は、死すべし。」

と書いてありました。二人の兄弟は、そこに立つて、この記しを見ながら考へま

した。

「僕達は、どちらへ行つたものだらう。もしも二人で右へ行つたら、僕達の偉い力や若い勢力の不名誉となるばかりだ。けれどだれだつて、左へ行つて死にたい者もないだらう。」

すると一人が云ひました。

「それでは、僕はお前より強いから、僕が左へ行つて、果して殺されるかどうか試して見やう。お前は、右の方へ行つて、王様になつた方が良いだらう。」

そこで二人は、互の着物の布を取り換へて、記念としました。そして互に、自分の道を行く途中道端に柱を立て、その柱に、何でも記して、それを道案内とすることにしました。それから二人は毎朝、お互ひの着物の布を顔に蔽つて見て、もしその布に血が見えたら、それは一方が死んだといふ知らせである、だからその不幸があつた時は、大急ぎ歸つて、その屍を探すことにしやうといふ約束をし

て、二人は別々の方へ別れました。右へ行つた方の息子は、或る立派な國へ着きました。この國には、王様と后様とがお出でになり、お二人の間にはナスダシヤといふ、非常に美しいお姫様が有りました。王様は、軍人の息子を見て、息子の騎士のやうな勇ましい氣象を大へんお喜びになりました。そして、六ヶ敷いこともお調べにならず、お姫様の花婿として、イワン王子と呼び、全國土を治めることを任せました。イワン王子は愉快に暮し、お姫様を此の上もなく可愛がり、又、國內を立派に治め、いつまでも楽しく暮してゐました。

こちらの左の方へ行つた軍人の息子は、晝も夜も休みなしに歩きました。そして三ヶ月の間歩き通して、遂々或る國の都へ着きました。この國には丁度御大喪があつて、どの家も黒い布で蔽はれ、人々は皆夢の中にある如に黙つて歩いてゐました。軍人の息子は、とある貧しい老婆の家へ宿を取つて、そのお婆さんに訊きました。

「お婆さん、此の國の人々は、どうしてあんなに悲し相に歩いてゐるのです。そしてどの家も黒い布で蔽はれてゐるではありませんか。」

「それはね兄さん。けふは大へん悲しいことが起つたのだよ。といふのは、この海へ出ますと、岸に大きな岩がありますが、その岩の向ふの海の中から、頭が十二ある大蛇が出て来て、一時間毎に人を一人づつ呑んで終ふのですよ、とう／＼けふは王様の御家族の番になつたのです。王様には三人のそれは／＼美しいお姫様がございますが、いまは、三人のお姫様の、一番お若いお姫様が海邊へ来て大蛇に呑まれる番に爲つたのですよ。」

軍人の息子は、之を間くと早速馬に打ち乗り、海邊へ飛んで行き、大きな岩のある所へ行きました。海岸の岩の所には、天女のやうに美しいお姫様が、鐵の鎖でしつかりとしばられてゐました。そのお姫様は、馬に乗つて走つて来た軍人の息子を見つけると、悲し相な聲を出して云ひました。

「早くこの場を逃れなさい。いまに十二の頭ある大蛇が来て、わたしを飲んで終ふのです。あなたは直ぐ逃げなさい。でない、怖ろしい大蛇に吞まれます。」

「そんなに怖がることは有りません、お姫様、屹度私が退治して上げます。」

そして軍人の息子は、お姫様の所へ行き、縄でも切る様に、その鎖をきれぎれに切つて終ひました。それから大きな岩の圍りに根こぎにした柏や松の火葬薪を山に積んで、それに火をたきつけました。そして美しいお姫様の所へ立ち寄り頭をお姫様の膝の上に凭せて申しました。

「僕は、少し眠りますから、どうぞお姫様は海の上を見張してゐて下さい。もし、雲が起り、風が吹き出して、海の波が立ち騒ぎ始めたら、直きに私しを起して下さい。」

そして軍人の息子は、ぐつぐつと寝入りました。美しいお姫様は、寝てゐる軍人の息子を見守りながら、海の方を見張りしてゐました。するとにはかに雲の峰

が地平線上に起り、風が吹き出し、波が一時に騒ぎ出したかと思ふと、大蛇が、海の中から高く首を上げて、泳いで来ました。お姫様は軍人の息子をやり起しました。しかし軍人の息子は、どんなにゆり動されてもびくとも動きません。とうとうお姫様は泣き出しました。その涙が軍人の息子の頬の上に落ちると、息子ははつと目を覺まし、直ぐに馬に打ち乗りました。馬は一蹴りに二丈も飛んで走りました。すると十二頭の大蛇は、軍人の息子を目掛けて真直ぐに突進し、口から煙を吐き出しながら、軍人の息子に云ひました。

「神の様に賢い美しい若者よ、お前の最後は来たのだよ、早く此の世にお暇をして大急ぎ俺の咽喉の中へ入つて終へ。」

「汝呪はれたる大蛇よ。降参せよ。」

それから軍人の息子と大蛇は、命懸けの争ひを始めました。軍人の息子は、五十貫の劔を持つて、縦横無順に切り廻したので、劔は熱く焼けて、持つ所もなく

なりました。そこで彼はお姫様に向つて叫びました。

「早く助けて下さいお姫様。ハンカチーフを海の水にひたして、それを僕の劔に巻きつけて下さい。」

お姫様は直ぐにハンカチーフを海に浸して、軍人の息子にやりました。息子はそれを劔の圍りに巻きつけ、又大蛇に烈しく切り掛りました。けれど流石の劔も十二頭の大蛇を一打ちに切り殺すことは出来ませんでした。そこで息子は、薪の塚から、燃えてゐる松の枝を取り上げ、大蛇の目を焼きました。それから十二の頭を皆切り取つて、岩の上へなげつけ、その身體は、海の中へ放りこんで、家へ歸つて来ました。家へ歸ると御飯を食べて、十晝夜の間、ぐつすりと眠りました。

こちらでは、王様は一人の家來を呼んで云ひつけました。

「海邊へ行き、もし幸ひにお姫様の骨でもあつたら、拾い集めて来て呉れよ。」

家來は海邊へ行つて見ると、お姫様は何の怪我もせず居りました。家來はお姫様を馬車に乗せ、深い森の中へ引き入れ、ずつとく奥の方へ行つて、そこで腰から大きな洋刀を取り出し、それを研ぎ始めました。

「何をなさるのです。」とお姫様は訊きました。

「わしは、洋刀を研いでゐるのですよ。わしはお姫様を殺さうと思つてゐるので、それが厭なら、大蛇を切り殺して、お姫様を助けたのは、この私であるやうに、お父さんに告げますか。それなら助けて上げます。」

と云つて、家來はお姫様をおどしました。お姫様は仕方ない、その家來の云つた通りをお父様に申し上げることを誓ひました。

王様はお姫様を掌中の玉のやうに可愛がつてゐたので、いまお姫様が無事に歸つて来たのを見ると、大へんなおよろこびで、そのお禮に、お様様を家來の花嫁

に呉れることにしました。その噂は、直ぐと國中に擴まりました。軍人の息子も、王様の宮殿で結婚の式が擧げられるといふことを聞いたので、直ぐに宮殿へ行きました。宮殿では、いま盛んな結婚の式が開かれて、多くのお客さん等はお酒を飲んだり御馳走を食べたりして、種々な楽しい遊び事に有頂天になつてゐる最中でした。お姫様は、軍人の息子の劔に巻いてある、自分の大切なハンカチーフを見つけて、急に椅子から立ち上り、軍人の息子の所へ馳せ寄つて、その手をしっかりと握りながら叫びました。

「お父さん！ この國の王様、あの怖ろしい大蛇を殺して、酷い死に目からわたしを助けてくれた人は、此のお方です。あの家來は、森の奥へわたしを引き入れ、洋刀を研いで、わたしを殺すと云つておどしたのです。」

王様は非常にお怒りになつて、家來を絞殺して、その代りに軍人の息子を、お姫様の花婿としました。そして盛んな結婚の式を擧げました。若い夫婦は日々

に榮えて、幸福に暮し、一生を楽しく送りました。

こちら右の方へ行つた軍人の息子は、その後、こんな事が起りました。

或る日獵に出掛けました。すると、一疋の牝鹿が風のやうに飛び出しました。

軍人の息子は、拍車を馬の腹に當て、牝鹿の後を追つて行くと、或る廣い野原へ出ました。そしてとうとうその牝鹿を見失つて終ひました。軍人の息子は餘り夢中で追ひ掛けて來たので歸り途を忘れて終ひました。そこで四邊を見廻りながら考へました。ふと見ると、その野原の中には、一條の小川が流れてゐました。その小川の中には、二羽の白い鴨が泳いでゐました。軍人の息子は、その二羽の鴨を弓で射殺し、水の中から引き出して背囊の中へ入れ、又先へ歩いて行きました。するとこん度は白い石造りの宮殿が有りました。息子は馬から下り、馬を柱に繋いで、宮殿の中へ這入つて行きました。廣い宮殿はどこにも人一人のません。只一つの室に、ストーブが燃えてゐて、その上には、いろ／＼の御馳走の入つた

淺鍋が乗つてありました。食卓の上には、皿やコップや洋刀を用意して有ました。軍人の息子は、先刻小川で捕つた鴨をポケットから出し、それを料理して、淺鍋の中へ入れて煮ました。それからそれを食卓に載せて食べ始めました。すると突然どこからか知れぬが、口にも筆にも盡せない實に美しい女が現はれて来て、軍人の息子に向つて云ひました。

「御馳走をいたしませう、軍人の息子さん。」

「御免下さい。美しい娘さん。茲へお座りになつて、御馳走を食べませんか。」

「一緒に御馳走になりたいのですが、あなたは魔法を使ふ馬をお持ちになつてゐるので、それがわたしに怖いのです。」

「いや美しい娘さん。それは飛んだ間違ひですよ。その魔法使ひの馬は、僕の家

に置いてあります、けふは普通の馬に乗つて来たのですよ。」

これを聞いた美しい娘は、見る／＼大きくなつて、怖うしい獅子に變りました。

そして大きな口を開いて、軍人の息子を、頭から一呑みに呑んで終いました。この女は實は人間ではなくて、こちらの軍人の息子に殺された大蛇の妹であつたのです。

こちらの軍人の息子は、別れた兄弟を思ひ出し、ポケットから着物の布を出して、顔を拭ふと、布には一面に血がつかまりました。そこで非常に驚き、大事が起つたに達ひないと泣き悲しみました。それで、お父さんや妻に、お暇を戴いて良馬に打ち乗り、兄弟を探しに出掛けました。彼は所々方々歩き廻つた末、やうやく兄弟のゐる國へ着きました。そして兄弟の様子をいろ／＼と訊き正しました。そして、兄弟は、或る日獵に出掛けて、それつきり歸つて来ないで、全く行衛不明だといふことが判りました。そこで彼は、兄弟の行つたと同じ道を辿つて、獵に出掛けました。すると一疋の牝鹿が風のやうに飛び出しました。彼はその後を追つて廣い野原まで來ましたがとうとう牝鹿を見失つて終ひました。ふと見るとそ

の原には小川が流れてゐて、二羽の白い鴨が水の上に泳いでゐました。彼はそれを射殺してポケットに入れ、そして白宮殿の所へ来ました。宮殿の中へ入つて見ると誰れもゐない。そしてある一室にストーブが燃えてゐて、その上には、いろいろの御馳走を入れた浅鍋が乗つてゐました。彼は射殺した鴨を料理してそれから、庭へ行き石段に腰掛けて、料理した鴨を切つて食べてゐました。すると突然に、美しい女が彼の前へ現はれて来て云ひました。

「宜しう召し上りなさい、だがあなたは何故お庭へ出て物を食べて被入るの。」
 「室の中は陰氣でなりません。外の方がずつと氣持ちが良いのです。茲へ腰を下ろして御馳走を一緒にお食べになりませんか。」

「わたしは、よろこんで御馳走になりたいのですけれど、あなたの魔の馬が怖いものですから。」

「いや御心配には及びません娘さん、僕は普通の馬に乗つて来たのですよ。」

美しい女は、彼の云ふことを本當にして、急に怖い獅子と變りました。そして彼を一呑みにしやうとした丁度その時に、魔の馬が走つて来て、獅子を蹄の下へ踏みつけました。彼は速座に劔を抜き鋭い聲を出して、呼びました。

「立てこの呪はれもの、貴様は俺の兄弟を呑んだらう。その兄弟をいまこゝへ返してよこせ、もし返さないと、粉々に切りきざんで終ふぞ。」

すると獅子は、再び本の通りの美しい女に變つて、彼にお願ひしました。

「どうぞ赦して下さい。命の水の入つた罎がその腦掛けの下に有りますから、それを持つて、わたしの後について、地下室へゐらつしやい、そしたらあなたの兄弟を生かして返して上げます。」

彼は、美しい女の後について、地下室へ行つて見ると、兄弟は片々になつて轉がつてゐました。彼は命の水を兄弟の身體に注ぎ掛けると、兄弟の片々の肉は皆一緒に結びつかりました、彼はもう一度命の水を注ぎかけると兄弟はむつくり起

さ上つて云ひました。

「お、僕は随分長い間眠つてゐましたね。」

「さうだ、あなたは僕をそつちのけにして長い間眠つてゐましたよ。」

それから兄弟二人は、王様の宮殿に歸り、三日の間御馳走を食べて別れました。助けて貰つた軍人の息子は、天女のやうな美しいナスタンヤ姫と結婚をして、お互に可愛がり合つて、盡きない幸福の中に、仲良く暮しました。こちらの息子も、自分の妻やお父さんの所へ歸つて行きました。その途中で、私はその息子さんに出逢つたので、三日の間一緒に御酒を飲んで楽しみました。その時、息子さんが私に話して呉れたのが、此の物語りでございます。(終り)

イブンの馬鹿物語

そのむかし遠い、或る國に立派な都がございました。この都にはゴロクといふ王様と、モルコヴァといふ后様とが住んで居りました。王様の家來には、多くの賢い貴族達や、金持らの王子達や、勇敢な武士達が有り、その他少なくとも十萬の軍人が有りました。この町に住んでゐる人々の様子を見ると、奇麗に髭を撫でつけてゐる立派な商人や、悪賢い利口な騙師や、獨逸の商人や瑞西の美人や、酒に酔つた露西亞人などでした。そして都外れの郊外には百姓達が住んで居りました。その百姓達は畑を耕やし種子を撒きそれを收穫して粉にひき割つて、市場へ行つて賣り、そうして骨を折つて作つたお金で、お酒を飲んで終ふものばかりでした。

郊外の或る所に、一つの破れ家が有りました。此の家には、バリホム、トーマス、イブンといふ三人の子供を持つたお爺さんが住んで居りました。この爺さんは智慧があるばかりでなく、大へん氣轉が利きました。それで「魔の神」と逢つた時は、いつも氣軽く話をし掛けて、そしてお酒を充分飲ませすつかり酔はせては、

いろいろ不思議な秘密を訊き取りました。そして「魔の神」から聞いた不思議な事を人の前でやつて見せるので、近所の人々は、お爺さんを、魔法使ひとか、妖術者とか呼んで、何事でも知つてゐる賢い人として尊敬してゐました。實際お爺さんは、驚くやうな不思議な事をするのでした。もし誰れか、自分の可愛い人と別れて、心配に日毎々衰へて行く者があつたら、お婆さんは、いつでもその別れた可愛い人をつれて来るやうな方法を教へて呉れました。又物を盗まれた人があつたら、それがどんな所に隠されてあつても、魔の水と、網とを用ゐて、それを盗賊の手から取り返して呉れました。

お爺さんはそんなに利口でしたけれども、子供達はお爺さんには似ませんでした。長男二男の二人は、大へんなのらくら者で、愚かな何の考へもない軽はずの人でした。そして禮儀などは少しも知りませんでした。この二人ともお嫁さんを貰つて、子供が出来ました。三男はお嫁さんが有りませんでした。お爺さんは、

三男のことを少しも構ひつけませんでした。といふのは三男は生れつきのお馬鹿さんで、飲んだり喰つたり寝たり、ストロブの上に寝ころんだりするより外、數を三つ迄もかぞへることが出来ませんでした。

そして三男のイヴンは、よく一人でのそりのそりと歩き廻るのが好きでした。その上におとなしく、やさしくて、イヴンの口の中ではバタでも溶けさうも有りませんでした。それで、だれでもイヴンに向つて、その帯を呉れないかとも云つたら、イヴンは帯ばかりでなく、長い上衣まで脱いで呉れました。又イヴンに手袋を呉れと云ふと、帽子迄も取つて呉れるといふ風でした。それで皆は、イヴンをお爺さんと呼んでゐました。つまりイヴンは、生れつきの馬鹿で、そして何となく可愛氣のある子供であつたのです。

お爺さんは三人の子供達と共に長い年月を暮しました。とうとうお爺さんも身



體が弱つて、死期が迫つて來ました。そこで或る日三人の子供達を枕元に呼び寄せて、遺言をしました。

「わしの可愛い息子達よ、わしはもう死なねばならない、だからお前たちは、わしが死んだ後で、わしの望みを果さねばならないよ。それはお前達が代るく私わたくしの墓場へ來て、一夜づゝ通夜することだよ、先づ始めにトーマスが來て、次にバクホムが、最後に可愛いお馬鹿さんのイワンが來るのだよ。」

長男二男二人は、輕はずみな人達であつたから、お爺さんの云ひつけを別に考へもせずすぐに約束をしました。けれども末子のイワンは、何の約束もせずに、頭を掻いたばかりでした。

お爺さんはとうとう亡くなりました。三人の兄弟はお爺さんを墓場へ埋めました。三人は油煎餅や蜜菓子を食べ、又充分にお酒を飲みました。そして最初の晩にお爺さんの墓場へ行くのは、長男のトーマスでありました。けれどもトーマス



體が弱つて、死期が迫つて來ました。そこで或る日三人の子供達を枕元に呼び寄せて、遺言をしました。

「わしの可愛い息子達よ、わしはもう死なねばならない、だからお前たちは、わしが死んだ後で、わしの望みを果さねばならないよ。それはお前達が代るく私の墓場へ來て、一夜づゝ通夜することだよ、先づ始めにトーマスが來て、次にバクホムが、最後に可愛いお馬鹿さんのイワンが來るのだよ。」

長男二男二人は、輕はずみな人達であつたから、お爺さんの云ひつけを別に考へもせずすぐに約束をしました。けれども末子のイワンは、何の約束もせずに、頭を掻いたばかりでした。

お爺さんはとうとう亡くなりました。三人の兄弟はお爺さんを墓場へ埋めました。三人は油煎餅や蜜菓子を食べ、又充分にお酒を飲みました。そして最初の晩にお爺さんの墓場へ行くのは、長男のトーマスでありました。けれどもトーマス

墓場へ行くのが免當だつたのか、それとも怖かつたのか知れないが、イワンのお馬鹿さんに向つて云ひました。

「僕は明日の朝早く起きて、米を携かねばならないから、僕の代りにお前が行つて、お爺さんの墓場で通夜をしてくれないか。」

「宜しいしてやりませう」

とイワンは答へて、パンを一包み持つて、お爺さんの墓場へ行き、墓場の側へ横になり、グー、グーと鼾をかいて寝入りました。真夜中になると、急に墓が動き出し、風が吹き出で夜の鼻がポー、ポーと啼き始めると、墓石がどろんと轉げ落ちてその下から死んだお爺さんがのつこりと出て來ました。

「お前はだれだえ」

とお爺さんはイワンに訊きました。

「わたしです。」

とイワンのお馬鹿さんは答へました。

「宜しい、良く来た、わしの可愛い息子や。お前は良くわしの遺言を守つたから、お禮をしやう。」

とお爺さんが、云つて終ふか終はないうちに、夜明けの鶏が鳴いたので、お爺さんは墓石の下へ入つて終ひました。イワン馬鹿さんは、家へ歸るより早くストーブの上に寝ころびました。すると一人の兄が訊きました。

「どうだつたね、何かあつたかえ。」

「何も起りやしなかつたよ。只僕は一晚中寝て来ただけだ。それはそうと馬鹿にお腹がすいたから、何か食べるものをお呉れよ。」

とイワンは答へました。

次の晩は二男のバクホムの番でしたので、バクホムはお爺さんの墓場へ行かねばなりません。バクホムは兩腕を組んで、ちつと考へてゐたが、とうとう

イワン馬鹿さんに云ひました。

「明日の朝はね、僕は早く起きて市場へ行かねばならないから、お前が僕の代りに、お爺さんの墓場へ行つて呉れないか。」

「承知した。」

とイワン馬鹿は答へて、少しばかりのお菓子と。キャベツのスープとを持つて墓場へ行きました。そして昨夜と同じやうに寝入りました。真夜中になると、お墓が動き出し、暴風が起り、夜鶉の群が飛び廻り、墓石が塚から轉げ落ちて、その下からお爺さんがのつこりと出て來ました。

「お前はだれだえ。」

とお爺さんは訊きました。

「わたしです。」

「宜しい、わしの可愛い息子や、お前はよく、わしの云ひつけに反かなかつたか

「からお前をいつ迄も忘れないよ。」

とお爺さんが云ひました、その言葉が終るか終らないうちに、夜明けの鶏が鳴き、お爺さんは、墓の中へ隠れて終ひました。イワンは起きて家へ歸りストーブの上に寝ころんでゐると、一人の兄が訊きました。

「どうだつた。何か起つたかね。」

「いや、何んにも起らなかつたよ。」

とイワンのお馬鹿さんは答へました。三日目の夜、友達二人は、イワンのお馬鹿さんに云ひました。

「さあ、こん夜は、お前がお爺さんの墓場へ行く番だせ。こん夜でお爺さんの望みもすつかり果たされる譯だ。」

「宜しい、行つて來やう。」

とイワン馬鹿さんは答へて、油煎餅を持ち、大きな外套を被て、墓場へ行きま

した。すると又真夜中になると、墓石が塚の上から轉げ落ちて、その下からお爺さんが出て來て申しました。

「そこにゐるのは、だれだ？」

「わたしです。」

「宜しい、わしの可愛い息子よ。わしの云ひつけを守つたことは、決して無駄骨ではないよ。お前は良く眞面目にわしの云ふことを聞いたからお禮をしやう。」それからお爺さんは、不思議な聲を出して叫び、それから鶯の様な良い聲を出して、歌を歌ひました。

「さあ、お前、シツカ、ブルカ、ヴェシチエー、カウルカ、草の上の木の葉のやうに、頭を低くして、わしの前に立てよ。」

するとイワンのお馬鹿さんには、馬のやうに見えるものが、向ふから走つて來ました。ために地面は動き、その兩目は火のやうに輝き、兩耳からは、煙がもう

と出ました。それが近く迄走つて来て、地へ根が生いたやうにのつきりと突つ立つて、

「何の御用でございますか。」

お爺さんは、その馬の右の耳へ這入つて行きました。お爺さんは、その中で身體を良く洗ひ、着物を奇麗に着飾つて、これが先刻のお爺さんであつたかと思議に思ふ程、若い美しい青年になつて、こん度は、左の耳から出て来ました。その立派なことは、筆にも話にもつくせませんでした。

「さあ、わしの可愛い息子よ？」「わしの勇ましい立派な馬をお前に上げやう。」

とお爺さんは、イワンに云つて、こん度は、その馬に向つて云ひました。

「わしの馬よ。わしの大事な馬よ。わしに仕へると同じやうに、この男に仕へねばならぬぞ。」

お爺さんが、これを云つて終ふと直ぐに、村中の鶏は羽ばたきをして、夜明け

の歌を歌ひ始めたので、不思議な者共は、墓の中へ消えて終ひ、草がその上へ生へました。イワンのお馬鹿さんは、のそりくと家へ歸り、ストーブの上からだを延ばして、四圍の壁が顔はぬばかりに、高斯きで寝入りました。

「どうだつたね。」

と二人の兄達が、イワンに訊いた時、イワンは手を左右に振つただけで、一言も答へませんでした。

こんな風にして、二人の兄達はいかにも利口らしく、末子のイワンはいかにも馬鹿のやうにして共に暮してゐました。そして三人の兄弟は一日一日と、丁度女が糸を圓くかぐる様にくらして行きました。或る日のこと、その國の軍隊の隊長等が、喇叭やクラリオンを吹き鳴らし、大鼓を叩きながら、王様のおふれを市場や四辻などに立つて、皆の人々に傳へました。王様のおふれといふのは、かういふことでありました。ゴロク王様と、モルコヴァ 后様との間には、バクトリアナ

といふたつた一人のお姫様が有りました。このお姫様は、王様の位の後継人でありました。このお姫様の美しいことは、太陽も恥ぢ、月も顔色がない程でございました。そこで王様と后様とはかう考へました。

「姫にめあはせる男は、この國を良く治め、戦争には良く勝ち、國の議會は良く裁判し、王の老後を良く助けて、最後迄立派に、仕通す男でなければならぬ。」
そこで王様と后様とは、勇ましい若い武士で心のやさしく、良くお姫様を可愛がり、又お姫様は、その武士を可愛がる様に仕向ける花婿を探しました。けれどもさういふ花婿を見つるのは容易でありませんでした、と申しますのは、次のやうな困難なことが有るのでした。お姫様は誰のことも可愛がらない。もしお父さんが、花婿の話をする、とお姫様はいつでも極つた一つことを答へるのでした。

「わたしは、たれのこととも可愛がりません。」

又お母さんが、他の男のことを話すと、いつでもかう答へました。

「その男は、美しくありません。」

とうとう王様と后様とは、お姫様に申しました。

「わし達の可愛い姫よ、美しいバクトリア姫よ。こん度こそは、花婿さんを見つければなりませんよ。姫と結婚したいといふ諸國の大使等がこの宮殿へ集つて、御茶菓子は皆食べて終ひ、お倉のお酒は皆んな飲みつくして終つてゐるのだよ。それでも姫は、姫の心に合つた可愛い人を選ばうとしないのか。」
そこでお姫様は、王様と后様とに申し上げました。

「お父さまお母さま、わたしは、お父さまやお母さまの仰せに従ふことが出来な
いことを悲しく思ひます。只運命の神様が、わたしの可愛い人を極めて下さる
迄は待つてゐて下さい。それで何卒わたしに、頂上に張出し窓をつけた三十
二階ある塔を作つて下さい。さうして下されば、わたしは、その頂上の窓下

の所に腰掛けてゐませう。そしたら、どうぞおふれを出して、澤山の人を塔の下へ集めて下さい。皇帝でも、王様でも王子でも武勇ある武士でも、勇敢なる青年でもだれでも、宜しいから、各々良い馬に乗つて、わたしの腰かけてゐる頂上の窓まで飛びついて、わたしと指輪を取り換へるものがあつたら、その男をわたしの花婿ともし、お父さんお母さんの息子ともし、又王の位の後継者ともいたしませう。」

そこで王様と后様とは、賢いお姫様のことにばに、従ふことにいたしました。「宜しい、姫のいふ通りにして上げやう。」

と王様と后様とは答へました。王様は直ちに家來を呼び、櫛の材木を使つて三十二階の立派な塔を作る様にと命令しました。家來等は早速に三十二階の塔を建て、珍らしい彫刻で所々を飾り、又塔の圍りには、眞珠の花毛氈や、黄金の布や、イタリヤの毛氈などを掛けました。それからおふれを傳書鳩に結びつけ、各

國の大使達へ送り傳へました。そのおふれといふのは、王様の國へ集り、各々が誇りとしてゐる馬に乗り、三十二階の頂上へ飛びつき、お姫様と指輪を交換したもの、皇帝でも王様でも皇子でも皇太子でも、又勇ましい心の廣いコサツク人でも、だれに限らずお姫様の花婿となる事が出来るしその上に、お姫様と共に、此の國の王様の位の後継者となる事が出来るといふのでした。

その日が来ました。多くの人々は、空の星に届く様に登ってゐる高塔の建つてゐる廣場へ集りました。そしてお姫様は眞珠や花毛氈や、レースや、寶石の中の寶石で飾り立てた窓の下に腰掛けてゐました。人々の群衆は、大海の大波の如くどよめき騒ぎました。王様と后様とは、玉座にお座りになり、その周圍には、大公達、貴族達、大將達、英勇達の面々が、ずらりと居並んでゐました。そしてバクトリアナ姫君と結婚しやうとする人々が、湖のやうに押しよせて來ましたが、だれもくその高い塔を見ると、すつかり氣を失つて終ひました。若者等は全力

をつくして、走つたり、飛び上つたり、跳ねたりしましたが、皆大麥の束の様に、どさり／＼と地の上に眞逆様に落ちて、皆の人に笑はれるばかりでした。

かやうにして勇敢なる若者達が、バクトリアナ姫様と結婚しやうとして、死力を盡してゐる時に、イワン馬鹿さんの兄達も、このことを聞きました。そして一つそこへ行つて、面白いものを見やうと思ひ立ちました。二人の兄が出掛けやうとして、仕度をしてゐると、イワンの馬鹿さんは兄達に云ひました。

「僕も、一緒につれて行つて呉れよ。」

「馬鹿奴、家にゐて、鶏の番でもして居れ、」

「お前が行つたつて、何も出来やしないぢやないか、」

「そんなら宜しうございます。」

とイワン馬鹿さんは答へて、鶏小屋へ行き寝ころびました。

けれど、二人の兄達が出掛けて行つた後で、イワンのお馬鹿さんは、廣い平野

に出でその眞中で、英勇のやうに口笛を吹き、又武士の様な聲を出して、叫びました。

「おーい、シブカ、ブルカ、ヴェシチエー、カウルカよ。草の上の木の葉のやうに、頭を低くして、僕の前へ立てよ。」

やがて勇ましい軍馬が走り來り、大地はゆれ動き、眼を炬火のやうに輝かせ、耳からは煙を出しながら、人間の聲を出して云ひました。

「何の御用でございますか。」

そこでイワンの馬鹿さんは、その馬の右の耳へ入り、からだを良く磨いて、たいへん若い美しい男に變つて、左の耳から出て來ました。その男の美しさは、澤山の書物に書いても云ひつくせない程の、又人がまともに見てゐられない程の美しさでした。そこでイワンは、その馬に打ち乗り、サマルカンド製の絹で造つたむちを以て馬の肥つた尻を打ち叩きました。すると馬はますます、猛り狂ひ、泡を吹いて

樹木よりも高くはね上り、大川に出逢へば泳ぎ越し小川があれば、その尻尾で川の水を掃きさらつて終ひ、山の間を通る時は、その足で山を引き裂いて走つて行きました。そしてイワン馬鹿さんは、バクトリアナ姫様の塔へ飛び上り、元氣の良い鷹の如く上つて、三十二階の塔の三十階の所を、暴風の様に走り飛びました。それを見た人々は一聲に。

「あれを見よ、あれを見よ。」

と叫びました。王様は玉座から飛び上り、后様は驚きの餘り、「おー」と叫んださうでした。集つた人々は皆驚いて終つたのであります。

イワンの兄達は、家へ歸つてから互に云ひました。

「あいつは偉い英勇に違ひないよ、惜しいことに、あたたつた二階の違いでな。」それを聞いたイワンのお馬鹿さんは云ひました。

「何ですつて。あれは僕ですよ兄さん。」

「お前だつて？、聞いて呆れらア馬鹿奴、お前などは、ストーブの上に寝こんで、屑バンでも食つてゐれば良いんだよ。」

次の日も、イワン馬鹿さんの兄達は、王様の所へ出掛けやうとしますと、又もイワン馬鹿さんは言ひました。

「一緒につれて行つて呉れよ。」

「お前を連れて行け……馬鹿奴、家にあて、案山子の代りに、豆畑の雀の番でもして居れ、お前が行つたつてどうするのだ。」

と兄達は、相手にしません。イワン馬鹿さんは仕方なし。

「御最もです。」

と云つて、豆畑へ行き、地の上へべつたりと座つて、雀を追つてゐました。けれど二人の兄達が出て行つて了ふと、又もイワンのお馬鹿さんは、平野へ行き、その真中で、英勇のやうな口笛を吹き、又勇ましい聲で叫びました。

「おーい。シブカ、ブルカ、ヴェンシチユー、カウルカよ、艸の上の木の葉のやうに、頭を低くして、僕の前へ来いよ。」

すると勇ましい馬が走り来り、大地をふるはし、蹄の觸れる地面からは、火花を散らし、目は火のやうに輝かせ、耳からは煙を出し、人間の聲を出して叫びました。

「何の御用ですか」

それからイヴン馬鹿さんは、その馬の右の耳へ入り、今度は、話しに語ることも出来ず、又實際にはとも見られない程の美しい若い男に變つて、左の耳から出て来ました。それからその馬に打ち乗り、サマルカンド製の絹のむちを以て、鐵のやうなお尻を叩くと、馬は、ますます狂つて、ますます泡を吹き出し、地面から飛び上り、樹木の高さよりは、すつと高い所を走りました。そして、最初の一飛びで、一里も飛び、次の一飛びで、廣い川を越し、その次の一飛びで高い塔

の所へ着きました。馬は丁度鷹のやうに空中へ飛び上り、三十二階の塔の三十一階目の所を、旋風のやうに飛びすぎました。それを見た人は、

「あれを見よ〜。」

と叫び、王様は玉座から飛び上り、后様は思はず「お……。」と叫びました。王子達や、貴族達も、口をばかんと開けたまゝ立つておりました。

イヴンの兄達は、家へ歸つて、けふ見て来たことを話し合ひました。

「どうだい、けふのあの若い勇士は…、昨日の勇士よりは、もつと偉かつたね。あとたつた一階の違ひで、届かなかつたが。」

「何だつて？ あれは僕ですよ。」

とイヴンのお馬鹿さんは言ひました。

「黙つて居れ馬鹿奴、ストーブの上に寝て居れ、餘計なことをしやべらちないよ。」

三日目に、イワン馬鹿の兄達は、又王様の所の面白い見物を見に行かうとする
と、イワン馬鹿は言ひました。

「一緒に連れて往つて呉れないか？」

「お前見たいな馬鹿が？ お前は家にゐて豚にやるのに桶へ糞でも入れてりや
それで良いんだ、馬鹿な事はつかし考へてゐる奴だな。」

「さうか」

とイワン馬鹿は答へて、裏庭へ出て豚に餌を呉れて遣り、それから豚と一緒に
なつてワァワァ怒鳴つてゐました。けれども兄貴達が往つてしまふと、イワン馬
鹿は、野原の廣い所へ馳け出して往つて、大きな聲で勇ましく、英雄のやうな口
笛を吹きました。

「おゝいー お前。シブカ、ブルカ、ブエンシチユー、カウルカ、艸の上の木
の葉のやうに頭を下げて俺の前に立て！」

やがて大地が揺れて、勇ましい軍馬が馳け出して、その蹄の當つた地面からは
泉が湧き出し、當るたびに火花が散り、兩眼はまるで火の様、兩耳からは煙を
吐き出しながら、人間の聲を出して叫びました。

「何の御用で御座りますか」

そこでイワン馬鹿は、その馬の右の耳に這入り込んで、今度は若い武士になつ
て左の耳から出て來ました。その姿の美しいこと、可愛い事、まあどんな奇麗
な人でも、この姿には及ぶまいし、百人の賢人が百年かゝつても想像することが
出來ないだらうと思ふほどの立派さでした。イワン馬鹿はこの馬の鞍に確乎と乗
り、手綱をきつと引きしめて、鞭を一つ馬の尻骨にあてますと、疾風よりも早い
勢で馳け出しました。どんなに早く飛ぶ燕でも、その馬とは競べものにはなりま
せんでした。空行く雲のやうに走りますので、馬具は風を切つてヒュツ〜と鳴
り、大陽にきらきらと輝き、その黄色な鬃は風にひるがへりました。そしてお姫

様の塔を指して飛んで行きました。イワンがもう一度尻骨を叩きますと、今度は物凄く毒蛇の様に飛び上り、三十二階の塔の天邊に着きました。そこでイワン馬鹿は、バクトリアナ姫様を両手に抱へて、蜜の様な接吻をして、それから指輪の交換をしました。それから旋風に運ばれた様に廣場へ下りて来て、出會つた奴等を片端から引つくりかへしました。その中にお姫様がイワンの額に、金剛石の星を結び附けるや否や、勇ましい勇士は何處ともなく消え去つてしまひました。王様は驚いて王座から飛上り、思はず「お………」と叫びました。王様の御家來達は腕を組んだまゝお互ひに何んとも言ふ事が出来ませんでした。

イワン馬鹿の兄達は家へ歸つて来て、その事を議論し合つて話始めました。

「どうだい、今日の英雄は。今迄で一番だつたぢやないか、彼奴遂にお姫様の花婿になりやがつたせ、が一體、彼奴は何物だらう」

それを聞いてゐたイワン馬鹿は

「僕ですよ、兄さん」

と言ひました。

「黙つてろ、馬鹿！ お前なんざ彼方へ往つて屑パンに茸でも喰べてりやいんだ。そのお饒舌の舌を、口の中へ藏つて置け。ほんとに！」

けれどもゴロク王様は、非常な厳しい見張りを城下の周圍にまはして、一人でも町から出ないやうに全く閉ぢ込めて、若し王様の命令に服従しない者があつたら、其者を死刑に處して仕舞ふといふお觸れを出しました。それから、城下の老人から少年まで一同、王様の御殿へ来て挨拶をする様、そしてその額にお姫様の結びつけたダイヤモンドの星があるか無いかを見せる様にと言ひ渡しました。朝の暗い中から、澤山の人々は集まつて参りました。王様の家來は、みんなの額を覗いて見ましたけれども、どれにも、その影さへありませんでした。やがて夕飯

時が来ても王様始め御殿の中では、ちやんと支度された食卓に手一つ出すものもありませんでした、この時イワンの馬鹿の兄達も、王様にその額を御覧に入れる爲出かけやうとしますと、イワンは言ひました。

「僕も一緒に連れて往つて呉れないか」

「連れて往つて？ 馬鹿！ それよりもストーブの上に寝轉んで、蠅でも追つて居ろ、がお前の額に縋帯のあるのは何だ、怪我でもしたか」

「え、昨日、兄さんが出て往つた跡で、つい眠かつたもんで、大きな欠呻をして、その途端に、戸の所へ頭をぶつつけたんです、戸の奴は少しも怪我をしなかつたけれど、僕の額にやこんな大きな瘤が出来つちまひました」

二人の兄はこれ聞いて手を打ちました。それからイワン馬鹿は前の通りに、お姫様が心配し乍ら腰をかけてゐらつしやる塔の天邊を飛過ぎて、王様の前にやつて参りました。で王様の家来達はかう訊きました。

「お前の額に縋帯してゐるものは、そりや何だ、それを見せなさい、それは星の勳章ぢやないのか？」

イワン馬鹿はそれを断はつて、見せやうとはしませんでした。家来は腕づくでも見やうとしました。するとお姫様がこれを聞いて、イワン馬鹿を連れて來させ、その縋帯を解きますと、其處には、金剛石の星章が燦然と輝いてゐました。お姫様は、そこでイワン馬鹿の手を執つて、ゴロク王様の御前に出て申上りました。

「御覽遊ばしませ、御父上様、このお方が妾の極めた花婿で御座います、そして又王様御子息となり、王位の後継者となるべき方で御座ります。」

王様も最早何事も言ふことはありません、早速家来に命じて、お祝の酒宴を用意させイワン馬鹿とバトリアナ姫様とを結婚させました。三日の間、酒盛りが續いて多くの人々は酒を飲み、御馳走を喰べ、種々と楽しみ事の限りを盡しました。王様はイワン馬鹿を軍隊の大將に任じ、又夫々に土地や立派な家屋を與へました。

如何な事でも、話と實際とは一致するものではありません。イワンの兄弟は
側口でしたけれども、段々と金持ちになるにつれて多くの人には兄弟等を側口者
だといはなくなつてしまひました。この兄弟は王様の御引立てで偉い人間になると、
段々鼻を高くして高慢ちきになり、目下のものなどには、もう自分の家へ入るこ
となどは許しません。とうとうお終ひには、年を老つた大公貴族等にまでも威張
つた態度をとるので、その人々は打連れてゴロク王様の御前に出て、申上げまし
た。

「王様、イワン様兄弟は、銀の葉のある、黄金の實の成る、林檎の樹の生えて
ゐる處を知つてゐるから、それを持つて来て、王様に差上げるなどと、自慢を
申して居ります」

そこで王様は、イワンの兄の許へ使ひをおやりになつて、銀の葉の黄金の實の
なる林檎の樹を持つて来いとお言ひつけになりました。さう言ひつけられた兄達

も今更となつては、他の返事も出来兼ねたものでしたから、仕方なしにも、探し
に出ることにしてお答へをしました。王様は二人の爲に王様の厩から馬を引出し
て、それに乗つて行くやうにと云ひやりました。そこで二人の兄達は、その馬に
乗りました。銀の葉の、黄金の實のなる林檎の木を探しに出かけたのでありま
す。

こちらでは、イワンのお馬鹿さんは、自分の老ぼれた瘦馬に後ろ向きに乗つて
人に見られない様にして、町を出て行きました。イワンは、平原へ出で馬の尻尾
をついて、広い原へ放りなげて云ひました。

「さア、鴉や鳶等や茲へお出でよ、良い御馳走が出来てゐるよ。」

それからイワンは、いつもの軍馬を叫び出して右の耳から左の耳へ抜け出て、
その馬に乗りました。馬は、イワンを乗せて、東へ連れて行きました。そこには、
側に砂があつて銀の水の上に、銀の葉と、黄金の實のなる林檎の木が生へてゐま

した。イワンはそれを根から掘り取つて、家へ歸りかけました。ゴルク王様の所へ入る前に、イワンは銀の柱を樹て、天幕を張り、その下へ寝りました。こちらイ馳ンの兄等は、どこ迄も探して行つたが見つからないので、ぐつたりとうな垂れて、元氣もなくなり、王様に何とお詫びをして良いかそれに困りました。すると二人は、一つの天幕を見つけた、その天幕の側には、探してゐた林檎の木が有ります、二人の兄弟が近づいて見ると、中にイワンのお馬鹿さんが眠つてゐるので、それを起して銀の一杯入つた車を三臺とこの林檎の木と取り換へて呉れと頼みました。するとイワンは答へました。

「兄さん等、この林檎の木は私のものです。これは賣つたり、呉れたり出来るものではなくて、ある遺言に従つて譲ることが出来るものです、けれど、その遺言と云つても大したことでは有りません。只あなた達の各々右の足から足指を一つづつ切り取れば、譲り渡しても良いことになつてゐます。」



した。イワンはそれを根から掘り取つて、家へ歸りかけました。ゴルク王様の所へ入る前に、イワンは銀の柱を樹て、天幕を張り、その下へ寝りました。こちらイ馳ンの兄等は、どこ迄も探して行つたが見つかからないので、ぐつたりとうな垂れて、元氣もなくなり、王様に何とお詫びをして良いかそれに困りました。すると二人は、一つの天幕を見つけました、その天幕の側には、探してゐた林檎の木が有ります、二人の兄弟が近づいて見ると、中にイワンのお馬鹿さんが眠つてゐるので、それを起して銀の一杯入つた車を三臺とこの林檎の木と取り換へて呉れと頼みました。するとイワンは答へました。

「兄さん等、この林檎の木は私のものです。これは賣つたり、呉れたり出来るものではなくて、ある遺言に従つて譲ることが出来るものです、けれど、その遺言と云つても大したことでは有りません。只あなた達の各々右の足から足指を一つづつ切り取れば、譲り渡しても良いことになつてゐます。」



二人の兄等は頭を寄せて相談しましたけれども結局、それに従ふより外に仕様が有りませんでした。そこでイワンのお馬鹿さんは、兄さん等の足指を一つづつ切り取つて、その代りに林檎の木をやりました。二人の兄弟は大悦びでそれを王様のお前へ持つて行き、さも偉さうに自慢し始めました。

「御覽遊ばせ、王様、私等は、遠い〜國まで探しに行き、いろ〜な苦しい目に出逢ひまして、とうとう、王様のお望みを果しました、これがその林檎の木でございます。」

ゴロク王様は、一方ならず悦んで、すばらしい御馳走を作り、大鼓を鳴らし、喇叭や笛を吹きならして、イワンの兄等にお禮をし、更らに、町を一つづつ與へて二人の忠實な使ひをお褒めになりました。

それから間もなく大公等や貴族が王様の前へ出て申し上げました。
「銀の葉のある黄金の實のなつてゐる林檎の木を持つて来たことは、さう大し

た事ではございませぬ。あの二人は、こん度はコーカサス地方へ行つて、黄金の鬘で、銀の牙を持ち、二十匹の兒を引き連れてゐる、不思議な豚を、王様の所へ奉ると自慢をしで居ります。」

王様は又も使者を使はして、黄金の鬘ある銀の牙を持ち、二十匹の兒を抱いてゐる不思議な豚を連れて来るやうにとイヴンの兄達に命じました。

二人の兄弟は今更、他の返答も出来ません。仕方なし命令に従ふことにいたしました。そこで二人は、王様を悦ばす爲めに黄金の鬘で、銀の牙ある、二十匹の兒を連れてゐるといふ不思議な豚を探しにと出掛けました。これと同じ時刻に、こちらのイヴンのお馬鹿さんは自分の牝牛を引き出だし後ろ向きに打ち乗て町を出て行きました。平野へ出てから牛の角を持つて原の中へ放りつけ、そして叫びました。白狼や、可愛い小さな狐共、早くはせ集まつて来い、茲に御馳走が出来てゐるよ。」それから、イヴンは、いつもの軍馬を呼び出し、その右の耳へ潜り入り左

の耳から出て来て、その馬に乗りました。馬は、イヴンに乗せて南へと走つて行き繁つた森林の中へ入つて行くと、そこには、黄金の鬘を持った、銀の牙のある豚が、その後二十匹の兒豚を、ぞろ／＼と引連れてゐました。イヴンのお馬鹿さんは、手をうつてよろこび絹の輪索を豚の上に投げ掛けて掴へ、子豚を紐で馬の鞍へ結び、ゴルク王様の町の程遠からぬ所迄来た時、黄金の柱を樹て、天幕を張り、その下に寝てゐました。こちら二人の兄等も、王様に何と云ひ譯をしたら良いだらうと心配しながら同じ道を歸つて来ると、ふと天幕が見えて、その側に、絹の輪索でしばられて黄金の鬘ある銀の牙の二十匹の兒豚を引き連れてゐる豚がゐりました。二人は近寄つて、寝つてゐるイヴンをゆり起し、寶石の一杯入つた箱を三箱をやるからこの豚を呉れと云ひ出しました。

「この小豚は僕のですよ、これは賣つたり、何かは出来ませんが、只遺言に従へば譲ることが出来るものです、その遺言と云つても大したことでは有りませぬ

兄さん達の手の指を一本づゝ僕に切り取らせて下されば、豚を渡します。」
二人の兄等は頭を寄せて相談しました。

「人は、智識がなくつても生きてゐられるのだから、指一本位なくたつて死ぬ様なことはないだらう。」

二人は考へて、名々指を一本づゝイワンに切り取らせてその代りに、豚を取りました、二人は大悦びてそれを王様の前へ出で以前よりも更らに悦びながら王様に申し上げました。

「王様、私等は、遠く海を越え深い森を抜け、廣い砂漠を過ぎ、寒さと飢に苦しみなながら、とうとう王様の望のものを探して参りました。」

王様は、二人の忠實なる使者を大へんお悦びになつて、國中に祝ひの御馳走をなし、二人にやる酬いとして貴族の位にいたしました。

それでも、充分の御禮としない程でした。

やがて大公等や貴族等が王様のお前へ出て申し上げました。

「王様、黄金の鬘や銀の牙を持ち二十匹の兒を連れてゐる位の豚を探して來るのは大した役目でもございませぬ。いかに黄金の牙があつても豚の子は矢張り豚の子です。けれどあなたの花婿さんはもつと偉い役目をするゝ自慢して居ります、それは山の大蛇王の厩からダイヤモンドの蹄のある、黄金の鬘の駒を一頭連れて來て王様に奉ると云つて居ります。」

ゴルク王様は早速、イワンの兄弟の所へ使者を使はして、山の大蛇王の厩から、黄金の鬘ある金剛石の蹄を持つた駒を連れて來いと命じました。イワンの兄等は、そんなことは申しませんと拒んで見たけれども王様は聞き入れませぬ。

「餘計なことを言はずに、わしの寶を好きだけ持つて行け、又お前達の欲しだけ軍隊を連れて行け、そして、黄金の鬘の駒を茲へ連れて來るのだ、そしてならお前達を、この國の一番偉い位に昇せてやる。もし、連れて來なかつたら、

反對に位を取り上げて、宿なしにしてやるぞ。」

そこで、勇ましい侍や英勇達を連れて二人の兄達は駒を探しに出掛けました、けれど、何處へ行つて良いか判らないので、のたりにと方向も定まらず歩いて行きました。これと同じ時刻にイヴンのお馬鹿さんは、小さい杖をついて、平原へ行き、荒野の真中に立つて、例の軍馬を呼びました。軍馬は直ぐ来たのでその右の耳から入り左の耳から抜け出で、それからその馬に乗ると、馬は「西の國」の大きな島に走つて行きました。そこには金剛石の蹄と黄金の鬣ある駒が入つてゐる、七つの門と七つの戸の戸の鐵格子の厩があつてその前には、山の大蛇王が番をしてゐるので有りました。イヴンの馬は、所々方々あつちこつちと歩き廻つてと、うぐその所へ着きました。そこでイヴンは三日間戦つて漸くに山の大蛇王を殺し、又三日以上も費やして、漸くの事で、七つの門と七つの戸を打ち破り、中から、金剛石の蹄ある駒の黄金の鬣を捉へて引き出し、そして歸途につききました。

王様の都の近くへ来た時に、金剛石の柱を立て、天幕を張り、その下に寝つてゐました。その時にイヴンの兄達は弱り切つてゴルク王様に云ひ渡すことばもななく同道を歸つて来ると、突然大地が震ふて黄金の鬣の駒の嘶きが聞えました。二人はそこらを探し廻りました。すると眞暗な彼方の闇の中に、蠟燭の火のやうなものが光つて見えました。その光りは、駒の黄金の鬣が光つてゐるのでした。二人はそこへ近づき、天幕の下に眠つてゐるイヴンのお馬鹿さんを起して、寶石の箱と駒とを取り換へやうとして云ひ出しました。

「この駒は僕のです、兄さん達。これは買つたり何んかすることは出来ません。遺言に従つて譲り渡すものです。けれどその遺言と云つても大した事では有りません。あなた達の耳を一つづつ切り取らして下されば、取り換へます。」
 兄等二人は否とは云ひませんでした。それで、イヴンのお馬鹿さんは、兄達二人から耳を一つづつ切り取つて、その代りに、金剛石の蹄ある黄金の鬣の駒をや

りました。兄等は大悦びで、人の耳を痛める程の大きな駄法螺を吹き始めました。二人は王様の前へ出て申しました。

「王様、私等は、遠い海を越えて山の大神の王を打ち殺しました。御覽下さい。大蛇王は此の通り私達の耳を噛み取りました。けれど私等は、王様の爲めには、生命も寶も惜しみません、又血の河へも飛び込みませうし、手でも足でも財産でも犠牲にいたします。」

王様は之をおきよになつて大へん悦び澤山澤山の寶を與へ、二人を貴族の一番の位に昇せ、その上にお王様の暗場で三日の間、いろんな御馳走を造り通しでも間に合はない程の酒盛りをなし、その爲めに、王様の酒倉は、飲みつくしされた。そして、酒盛りの場でゴルク王様の右へは、イワンの一番上の兄が座り、左へは二男が座りました。酒盛りはますます賑やかになり、多くのお客等は、たら腹食べたり飲んだりして蜂の巢のやうに、ワンワンブンブンと騒ぎ立てました。する

と、イワンのお馬鹿ちゃんが、三十二階の塔へ飛びついた時と同じ姿で、その場へ現はれて来ました。丁度その時、イワンの一番上の兄は息もつかず大盃から酒を飲んでゐる所、二番目の兄は、鶴のロース焼きを口一杯に頬張つてゐた所で二人とも物を言ふことが出来ませんでした。イワンのお馬鹿さんは、王様の父上のお前へ謹んで膝まつき、如何して銀の葉の黄金の實のなる林檎を探したか、又、如何して黄金の毛ある銀のきばを持ち二十匹の兒豚を引き連れてゐる豚を探し當てたかそれから又、如何して、金剛石の蹄で黄金の鬣ある駒を見つけたか、その顛末を詳しく申し上げて、それから又、指と足指と耳とを出して見せて、これ等は二人の兄達から切り取つて、その代りに林檎と豚と駒とを呉れてやりましたと申し述べました。

それをお聞きになつた王様は非常に怒つてその場に立ち上り、家來に命じ箒を持って、イワンの兄等を追ひ出させ、一番上の兄の方は、牧場の豚の番をさせ、

二番目の兄は、家畜場の七面鳥の番をさせました。

そうして王様はイヴンのお馬鹿さんを、側に置き貴族の一番上の位に昇せ、大將達の長官にしました。そして人々は心から喜んで酒盛りをなし有る限りの御馳走を食べ、酒倉のお酒をみな飲み盡しました。それからイヴンのお馬鹿さんは、國內を治め、イヴンの法令は、立派で、勢力が有りました。そして王様の死後は、王の位につきました。イヴンは澤山の子供を持ち、家來達は長く事へ、近隣の人等は、良く尊敬しバクトリアナお姫様は、老年になつても若い時と同じ様に美しい姿であたといふことであります。

トーマス、ベルニコフ

(ロシアの腰弱の勇士)

或る村里に、トーマス、ベルニコフと云ふ貧乏な百姓がありました。トーマス

は話が上手で、生れつき人より優つて利口でした。けれど様子が如何にも弱々しいので、野良で働いては子供程の仕事も出来ませんでした。或る日、トーマスは畑を耕しに行きました。すると仕事が大變骨が折れて、トーマスの連れて行つた馬は、瘦せた借り馬だったので、すつかり弱り果て、鋤を引つ張る力も無くなつて終ひました。トーマスは、がっかりして、何時も座る石に腰を掛けて居ました。すると突然、蠅と蛇の群が四方八方から、わん／＼と集まつて来て、瘦馬の上を真黒に止りました。トーマスは急いで枯枝の束を持って来て、力一杯に馬の體中を叩き追ひました。すると瘦馬は少しも刺されないで、蠅と蛇とはバラ／＼に逃げて行きました。トーマスカ叩き殺した數を調べて見ると、九匹の蛇と、數知れない多くの蠅が死んで居りました。トーマス、ベルニコフは、につ／＼と微笑み乍ら考へました。

「冗談ぢやないぞ、俺は、一叩きに九匹の蛇と、數知れの蠅を打ち殺したのだ、

實に俺は英雄だ、豪傑だ、俺は最早畑などを耕さない、戦争をして、大英雄となつて、又長者にもなるんだ。」

そしてトーマスは三ヶ月なりの鎌を、肩から取つて右手に持ち、大きな籠を腰に吊し、籠の中へは切れる大鎌を入れ、そして瘦馬の背に乗つて、揚々として広い世界へ出向きました。

トーマスは、進んで行くと、道の傍に柱が立つてありました。その柱には、其處を通り過ぎた英雄の名前が記してあるのでした。そこでトーマスも、柱の上に白墨で大きく書きました。

一打ちにして、九匹の蛇と無数の蠅を叩き殺した大英雄、トーマス、ベルニコフ此所を通過す。」

かう書いてから、トーマスは、更らに進んで行きました。トーマスが此柱から半道ともゆかない間に、二人の若い勇敢な英雄が、此柱の所へ、馬を飛ばせて來

ました。そして彼等は、トーマスの書いた柱の文章を見て、お互に尋ね合ひました。

「之は未だ聞いた事のない英雄だ。何處へ行つたつて、そんな勇ましい男の乗つてゐる馬のことも聞いた事もない、そして此の男の勇ましい功績も少しも傳つて居らないが。」

二人は大意で馬を走らせて、トーマスに追ひつききました。そしてトーマスの姿を見ると驚いてしまひました。

「あいつ奴、何と云ふ情けない馬に乗つてゐるのだらう、哀れな借馬ぢやないか、然し勇敢なのは、あの馬でなくして、乗つて居る人に違ひない。」
そこで二人は、トーマスの傍に近く乗つて行き、大變謙遜して、丁寧に申しました。

「御機嫌良う、貴下」

トーマスは二人を振り向いて見てから、頭を動かさずに答へました。

「あなたは誰ですか？」

「エリヤ、ムロメツツと、アレシヤ、ボロビチです、私等は、あなたの御友人として頂く事が出来れば此の上もない悦びです。」

「宜しい、友人となつて上げませう、どうぞ僕について来て呉れ給へ。」

三人は、隣國の王様の所へ行つて、控所の中へ眞直ぐに行き、茲で三人は、馬に草をやり、自分等は天幕の下で休んで居りました。すると、王様は一百人の護衛兵に命じて、控所からその三人の外人人を追ひ拂はせやうとしました。そこでエリヤムロメツツとアレシヤ、ボロビチの兩人はこの英雄のトーマスに向つて申しました。

「あなた一人であの軍隊に向ひますか、それとも私等が行きませうか？」

「なんだつて、あんな下らぬ奴等へ向つて行つて俺の手が汚して良いと思ふか、

エリヤ、ムロメツツ、君が行き給へ、そして君の勇氣を奴等に見せてやるが良い。」

「そこでエリヤ、ムロメツツは彼の勇ましい馬に打ち乗つて、王様の騎兵に向つて進んで行き、鷹が鳩の群れを引き裂く様に、裂しく騎兵等に突進して打ち殺し、最後の一人迄、打ち平げて終ひました。茲に於て。王様はますます怒り出し、城下の歩兵、騎兵の軍勢を悉く召集して、その大將に向ひ、無禮にも王家の控所にある外人人を、直ぐ追ひ出す様にと命じました。そこで王様の軍勢は、喇叭を吹き乍ら、道一杯に塵の柱を立て、控所へ進軍しました。エリヤ、ムロメツツとアレシヤ、プロビツチはトーマスの所へ来て申しました。

「君が一人であの軍勢に向いますか、それとも私が一人で向ひませうか？」
トーマスは、横になつてゐたが、體を起しもせずに申しました。

「あれ程の奴ばらを打ち平げるに、僕のやうな英雄の手を汚されると思ふか、

アレシア、ポロピツチ、君が行つて、君の戦ひ振りを見せて呉れ給へ、僕は君が眞實に勇氣があるかどうかを、茲で見物してやらう。」

アリシヤは旋風の如く、王様の軍勢へ押し寄せました、甲冑は雷の如く鳴り、遠くから鎗矛を振り廻しつゝ、鋭どどい聲で叫びました「少しも容赦せず、貴様等を打ち殺して終ふぞ」、アリシヤは軍勢の上に飛び來つて壓し潰し始めましたすると敵の大將は最早形勢如何ともする事が出来ないので城下へ退き白旗を掲げて降参に來ました。

「勇敢にして力ある閣下、閣下の御名は何と申すのですか、そして閣下が、穩やかに此國內をお去りになるためには、どんな貢物を奉つたら宜しいのでせうか。」

「お前等の貢物を取るのはいはなしではない、わしはトーマス、ベルニコフと云ふ有名な英雄の部下だ。お前等はその英雄に貢物を奉らねばならぬ、もしその貢

物で満足したらお免しになるだらうし、満足しなかつた場合にはわしの大將はお前等の國全體を平げて終ふだらう。」

敵の王様は大將軍からこの話を聞いて、澤山の立派な貢物を奉らせ、又、立派な國使を使はして講和のことはを申し立てさせました。

「有名なる英雄トーマス、ベルニコス閣下、何卒吾等が王の宮殿へお出で下されて共にお住まい下され、そして支那の漢族の侵入をお防ぎ下さらば何よりの幸と存じ奉ります。もし英雄閣下、閣下が何十萬といふ支那の、軍勢を全く打ち破つて下さらば、王様のお姫様を差し上げ、又王様の死後は、此の國全部を閣下に差し上げるといふことでございます。」

しかしトーマスは威張つた顔をして答へました。

「何？ 宜しい、承知した、或はお前等の王様の申すことに同意するかも知れぬ。」

それからトーマスは、瘦馬に乗り、部下の二人の若い英雄も、後に従へて、堂々と、王様の所へ押し掛けて行きました。

トーマスが王様の出した御馳走の品々を未だ充分に食べ切らない中に、そして未だ充分にからだも休めないうちに、支那の漢の國からの恐迫の國使が來り、此の國を擧げて漢の屬國となり、又、王様の只一人のお姫様を漢に奉れといふことを申し出しました。そこで王様は答へました。

「お前の王様の所へ行つて告げよ、わしは最早漢を怖れない、わしにはいま有名なる英雄、トーマスベレニコフといふお方についてられる、この英雄は、太刀一打ちで、九匹の蛇と、無数の蠅を打ち殺した豪の者だ、もし汗王でも、お前等支那人でも、生きて居るのが詰らなかつたならば、わしの國へ來て、トーマスベレニコフ英雄に従ふがよい」

それから二日たつて汗は澤山の支那の軍勢を引きつれて王様の城下を集つて、王

様に申し送りしました。

「こちらにも、全世界にも比べなき、勇敢なる英雄がある、そちらの英雄のトーマスと勝負をさせて見やう、もしもそちらの英雄が勝つたなら、わしは降参して、わしの全國土を貢物としやうし、もしもわしの英雄が勝つたら、そちらのお姫君をこちらに渡しその上に、全國土を貢物としなければならぬらぬ」

「こゝでいよく、トーマスベレニコフは、勇氣を示す番になりました。それで部下の若い英雄の、エリアムロメツツと、アリシヤボビツチは、トーマスに云いました。『勇武なる英雄、わたし達の兄上よ、甲冑なくしてあの支那の英雄にどうして對抗することが出来ますか、どうぞ、私達の甲冑を着て、又我等の一番強い馬にお乗り下さい』」

これに對して、トーマスベレニコフは、かう答へました。

「どうしたといふんだ、甲冑などを着て、あの坊主頭からこの身を隠す必要が

どこに有る。俺はあの支那人を一握りで、押し潰して見せる。君等が俺を最初に見たときに、君等自身でさう云つたではないか、「あの馬を、見るのぢやなくて、あの勇士を見ねばならぬ」と。

けれどトーマスは、胸の中で、考へました。

「俺はいま大へん狼狽してゐる、宜しいあの支那人の思ふまゝに、この身體を切らせてやる、どんなことがあつても、耻は受けぬぞ」

それから二人の英雄は、トーマスの馬を引き出しました、トーマスは、堂々それに打ち乗り、枯枝の束で打ちながら、馬の足並宜しく、廣い原へ出て行きました。

漢王は、己が勇士を、城塞の如く鎧はせました、身體には、五十貫もある甲冑を着せ、種々の武器が用ゐる方を教へ、手には、十貫目もある大斧を持たせ、それからその勇士が出發する時に云ひさかせました。

「わしの云ふことを良く覚えて置けよ、ロシアの英雄が、力を以て勝てない時は、卑怯なことをして、勝負するだらうから、ロシアの英雄のしたことを此方でもするのだぞ」

そこで、支那の英雄は、敵の英雄に向つて、廣野へ進んで行きました、トーマスは、見ると、向ふから小山の様な支那の英雄が、頭の上にはビール樽の様なものを乗せ、からだは甲冑で、龜の甲の様に鎧ひ、殆んど動けない様な風をしてやつて來ました。そこで、トーマスは、何か甘い策略を運うさうと、考へました。先づ馬から下り、石に腰掛けて、矛を研ぎ始めました。それを見た支那の英雄も又直ぐに馬から下りて、馬を木に繋ぎ、自分の持つた大斧を石の上で研ぎ始めました。その時にトーマスは、矛を研ぎ終へて、支那の英雄の所へ進み行き、聲高々と申しました。

「吾々二人は共に英勇豪傑である。そして茲にいま眞劍勝負をするのだ、しか

し二人が、勝負を始める前に、互に正しき禮儀を重んじ、自分の國の風俗に従つて挨拶をしようではないか。

そして、トーマスは、支那人に向つて頭を低く垂れ非常に丁寧に禮をしました、それを見た、支那の英雄は考へました。

「オー、これは何か歎しごとが有るに違いない、俺はもつと、丁寧に禮をしてやろう。」

そして、支那の英雄は、大地に額をすりつけて禮をしました。そして、重い鎧を着たからだを起さない前に、トーマスは、突進して行つて。その首の所を一二度打ち叩いて、そして咽喉元をスバリと貫きました。それから、支那の英雄の駿馬に打ち乗り、赤楊の小枝を振り廻し、馬の臀を打たうと焦心りました。ところがその馬か木に繋いであることを全く忘れておりました。利口な駿馬は自分の背に人が乗つたと氣づくや力から限り引つ張つて、とうとう繋いである木を根こぎにしまし

た。トーマスベレニコフは非常に驚いて叫び出しました。

「助けて〜。」

しかし支那の軍勢は。トーマスを、暴風雪よりも怖がりました。そしてトーマスの叫んでゐるのを「逃げろ〜」と云つてゐる様に聞きました。そして支那軍勢は、後ろも向ふも見ずに一目散に退却してしまひました。けれど英雄の馬は、軍勢の真中へ突進して、その足下に軍勢を踏みじり、又、根こぎの木は、軍勢をちり〜ばら〜に散らしました。その馬が通つた跡は、廣い道になりました。

支那軍勢は、再びトーマスには敵對しないことを誓いました、そしてこの、決議は、トーマスに取つて非常に幸なことでした、トーマスは、自分の供馬に乗り城下に歸つて行くと、たれもかれも、トーマスの、力量や、勇氣や、そのめざましい戦ひ振りに舌を巻いて驚きました。王様は、悦んでトーマスに向つて云ひました。

さあトーマス、何が欲しいか、少しく寶の半分とわしの娘を呉れるとしやう、又は、わしの立派な國の半分をやるとしやうか。

「左様です、もし宜しかつたら、此の國の半分を戴きたうございます。しかし、お贈物として王様の寶の半分を添へて、王様のお姫様も戴きたいのです。そして何卒、わたしの結婚式の席に、わたしの若へ兄弟等のエリヤ、ムロメフツと、アリシヤボビツチの二人を呼ぶことを忘れないで下さい。」

そして。トーマスは、美しいお姫様と結婚しました。式に臨んだお客様が結婚式が終つから二週間も頭痛がした程、そんな目出度い式を祝つたといふことです、私もその式に臨んで澤山の蜜糖水やらビールを御馳走になり、その上、立派な贈り物も戴きました。その時、聞いた話しがこの物語りです。(終り)

お饒舌な女の話

その昔、或る所にお爺さんとお婆さんが住んで居りました。お婆さんは決して悪い人ではなかつたけれど、只一つの缺點は、おしやべりと云ふ事でした。お爺さんから聞いた事でも、又家の中に起つた事でも、何んでも構わずに村中に吹聴して歩くのでした。

又此お婆さんは、話の中の何事にも、疑を挿さずには居られませんでした。そして良く謹事をこき交せて話すのでした。お爺さんは其を悲んで、しばしばお婆さんを責めました。

或る日のこと、お爺さんは森の奥に、獨りで薪を取りに参りました。丁度、森の入口まで来ました時、一寸踏んだ地面がぼこつと少し凹みました。

「オヤ、これは大變だぞ仕うしたんだらうな、待てよ、少し茲を掘つて見やう、ひつよとしたら、何かよいものでも掘り出せるかも知れんせ。」

とお爺さんは考へて、試みに五六度、掘返して見ると、金貨や銀貨が一杯入つ

た、小さい釜が中から出て来ました。

「まあ、なんととうまい事があればあつたものではないか一體此寶物はどうしたもんだらうな、此儘、家に持つて行けば、あのお婆さんに、屹度見つかるに違いない。見つかつたら最後、お婆さんに、そこら中をふれ廻されて、却つてこんな寶物を見つけたことを後悔する様になるかも知れない。」

そこでお爺さんは、長い間寶物の傍で考へ込んで居りました、仕舞に漸く甘い考へが胸に湧いて参りました。お爺さんは、再びその寶物を地の中に埋めて、その上に薪の束を載せ、そして町へ行きました、町で生きてゐる梭魚と、野兎とを買つて、又森へ戻り、其邊の大きな樹の頂上に兎を吊るし、梭魚は小川に持つて行きました。小川にはお爺さんの魚籠が有るので、その中へ梭魚を入れ、そして、川の浅い所に置きました。

それから、お爺さんは家へ、心も晴々と馬を走らせて歸りました。





た、小さい釜が中から出て来ました。

『まア、なんとうまい事があればあつたものではないか一體此寶物はどうしたもんだらうな、此儘、家に持つて行けば、あのお婆さんに、屹度見つかるに違いない。見つかつたら最後、お婆さんに、そこら中をふれ廻されて、却つてこんな寶物を見つけたことを後悔する様になるかも知れない。』

そこでお爺さんは、長い間寶物の傍で考へ込んで居りました、仕舞に漸く甘い考へが胸に湧いて参りました。お爺さんは、再びその寶物を地の中に埋めて、その上に薪の束を載せ、そして町へ行きました、町で生きてゐる梭魚と、野兎とを買つて、又森へ戻り、其邊の大きな樹の頂上に兎を吊るし、梭魚は小川に持つて行きました。小川にはお爺さんの魚籠が有るので、その中へ梭魚を入れ、そして、川の浅い所に置きました。

それから、お爺さんは家へ、心も晴々と馬を走らせて歸りました。

「お婆さん〜、とても、言葉にもなんにも云い盡せない様な甘い事が起つたせ。」

とお爺さんは云ひました。

「何ですまア、お爺さん、何故、それを早く云はないんですよ。」

「お前さんは、それを早く聽いて村中へ吹聴して歩きたいんでせうな。」

「大丈夫、誰にも云ひませんよ、立派に神様に誓ひます、もし妾を信んじないならば、柵から聖像を取つて、接吻でも致します。」

「宜しい〜、解りました。實はねお婆さん」と云つて、お爺さんは、お婆さんの耳へ口を寄せて、低い聲で囁きました。

「森の中で金貨と銀貨の一杯入つた釜を掘り出したのだよ。」

「オヤ、それで、どうしてそれを、家へ持つて來なかつたの。」

「それもな、俺等二人で行つて、持つて來た方がよいからな。」

そこでお爺さんは、お婆さんを連れて森へ行きました。二人で道を行く時、お爺さんはお婆さんに申しました。

「お婆さん、俺が聞いた事でもあり、又、皆んなが俺に、いつか話したことでもあるが、いまに魚が樹の上に止まつて、森の獸が水の中に住むと云ふことだよ。」

「お爺さんは何を考へてるんでね、此節の人には、誰もかれも皆な嘘言ばつかり云つてゐるのですよ。」

「嘘言！、嘘言だつて云ふの？、そんなら論より證據、お婆が自分で來て御覽なさい。」

さう云つて、お爺さんは梭魚の吊されてゐる樹を指しました。

「オヤ、マー、何とこれは不思議だね、あの梭魚はどうして、あんな所へ登つたのだらう、皆なも、矢張り、眞實の事をお爺さんに言つたのだね、マー。」

とお婆さんは驚いて叫びました。けれどお爺さんは、其所に突つ立つた儘、兩腕を動かし、兩肩をゆすり、頭を振つて、いかにも、自分の眼を信じない様な様子をして居りました。

「お爺さん、お前さんは、なんだつていつ迄も突つ立つてゐるんですね。」

「イヤ、一層の事、木に登つて、あの梭魚を取つて來やうと思つてさ、夕飯の御馳走にもなるからな……。」

そこでお爺さんは木に登り、梭魚を取つて、又先きへと行きました。小川の所まで來ると、お爺さんは馬を止めました。それを見たお婆さんは、お爺さんを呼びかけました。

「何を視いてゐるのですね、早く急いで行きませんか。」

「いや一寸お待ちなさい。何か知れんが俺の魚籠の中で、ごとくしてゐるものがあるよ、一つ様子を見てやらう。」

お爺さんは、そこへ行つて魚籠の中を覗き乍ら、お婆さん呼びました。

「お婆さん、早く来て御覽なさい、兎が此魚籠の中に入つてゐるよ。」

「それぢや、皆なの言つた事は、嘘ぢやないのだね、早くそれを取りなさい、晩の御馳走になりますから。」

そこでお爺さんは、兎を捕へて、寶物のある方へ、眞直ぐに道を急ぎました、行きつくと、先づ薪を取り除け、土を深く掘つて、釜を取り出し、それを二人で家を持つて歸りました。

お爺さんと、お婆さんは急に金持になつて、楽しく暮す様になりました。しかしお婆さんは、まだ中々おしやべりを改めません、毎日の様にお客を招んで、お爺さんを、邪魔にして、家から追ひ出さぬばかりにして、いろんな御馳走を致しました。爺さんは、お婆さんの悪い癖を直さうと思ひました。

「お婆さん、お前さんは俺の言ふことを、聞き入れませんかね。」

「かれこれ、言ひなさるな、あなたと一諸に此金を見つけたのですよ、それで充分楽しむのは當りまへですよ。」

とお婆さんは、いつも答へるのでした。お爺さんは、長い間、黙つてゐましたが、到日お婆さんに云ひ出しました。

「お前さんの好きな様になさるが宜しい、けれど俺は、最早、一文もお前さんにお金を上げませんから。」

するとお婆さんは怒つて、お爺さんと口争ひを始ました。

「あなたは、あなたのお金を、みんな持つて行つたら良いでせう。この宿なし爺さん、鴉がお前さんの骨を突つつく所に追ひ出して終ひますよ、お前さんは、自分のお金で何んの楽しみもしないんですね。」

とお婆さんは怒鳴りました。お爺さんは、お婆さんを責めましたけれど、お婆さんは、お爺さんをほつたらかして、お爺さんを訴へるため、奉行所へ参りました。

た。

「わたいは、御役人様の御情けに預りたう御ざります、實は妾の、何の役にもたれないお爺さんに付て歎願に上つたので御ざいます。と申しますのは、今から少し前に、お爺さんはお金を見付けてから、少しの仕事も致しません。そこで全く働かうとはせず、毎日お酒を呑んでは、ぶら／＼と遊んで歩いてばかり居るのです。どうぞ長官様お爺さんから其お金を取り上げて下さい、男たるものがお金を無駄使ひするとは全く悪い事でございます。」

奉行所では、お婆さんに大變同情して、年とつた役人を使はして、お爺さんとお婆さんとの間の裁判をさせました。お役人は、村中の老人等を集めてお爺さんの所へ行きそして申しました。

「奉行所からの仰せだ。お前の持つて居るお金を皆なこつちに出せ。」

お爺さんは、只肩を動かしただけで答へました。

「何のお金で御座います。俺はお金のことなどについては一切存じませんです。」

「知らない？お前のお婆さんがいま奉行所に来て、お前のことを訴へ出たのだもし謔言を吐くならお前のためにはならないぞ、もしもお前が、残りの金を皆な奉行所に納めるならば、今度だけは特別に許してやるが、どうぢや。」

「しかしお役人様、どうぞお許し下さいまし、お役人様のお云ひなさつてゐるそのお金とは、何のことですか。俺の婆は、夢をきつと見たのでせう、その夢に見た出鱈目を申し上げたので、お役人様はお氣毒にもそれを本當になさつて仕舞つたのです。」

「出鱈目だつて？、決してそれは出鱈目では御座いません、お前さんは金貨と銀貨の一杯入つて居る釜をちやんと持つて居るぢやないか。」

とお婆さんは怒鳴り出しました。

「お前さんは気が違つたのだよ、お役人様どうぞお許し下さい。この事だけはどうぞ良し御詮議をなすつて下さい、もしお婆さんが、それを間違ひないと證據立つる事が出来たら、俺のある限りの財産を差上げませう。」

「すると妾が、あなたに對してそれを證據立てる事が出来ないと思ふのですか、あなたは馬鹿者ですね、わたしはきつと證據立てゝ見せますよ、それはこんな譯で御座います、御役人様。」

とお婆さんは云い始めました。

「わたしは、細いこと迄も良く知つて居ります、わたし等が一諸に森に行きますと、木の上に梭魚がとまつて居りました。」

「梭魚が？」

と役人は驚いた様にお婆さんの顔を見乍ら、聞き返しました

「わしを馬鹿と思つて居るのかえ」

「いゝえ、わたしは決して馬鹿には致しません、お役人様、わたしはほんとうの事を申し上げてゐるのです。」

するとお爺さんが、そこへ口を插みました。

「お役人様、あれが、あんな出鱈目を申し上げても、それを眞實とおさゝりになるのですか？」

「わたしは決して出鱈目を申し上げは致しません、わたしは、眞實の事を申し上げてゐるのです、お前さんは、小川の魚籠の中に兎の居つた事を忘れて終つたのですか」

それを聞いた村の老人等は、一度にとつと笑ひ出しました。お役人さへ笑ひ乍ら、長い顎鬚を引つ張り始めました。お爺さんは又、お婆さんに申しました。「しつかりしなさいよお婆さん、皆さんがお前さんを笑つてゐるのを知らないかね」

それから皆さん、わしのお婆さんの言ふことが全くあてにならないと云ふ事が良くお判りでせうね」

「良く判つたよ、私等は此の世に生きて居るうちは、川の中に兎が居たり、森の木の上に梭魚がとまつてゐたりすることは先づないでせう」

お役人も、此事件は、お終ひまで調べる必要もないと云ふことが判つたので、手を振り乍ら、其場を退いて、奉行所へ歸つて仕舞ひました。

お婆さんは、皆なの人に散々笑はれたので到々おしやべりを止めて、お爺さんの云ふ事をきく様になりました。そこでお爺さんは、お金で澤山の商品を買つて、町へ行つて住み、その品物を賣つて澤山のお金を儲け、ますます繁昌して一生涯、幸福に暮したと云ふことです。(終り)

白い家鴨

ある大變偉い立派な王子が、ある非常に美しいお姫様と御結婚をなさいました。そして王子が未だお姫様をしみじみと見たことも話しかけたことも、またお姫様のお話を聞いたことも、殆んど無かつた時分に、王子はお姫様を、知らない人達の中に残した儘、遠い旅路に上らなければならぬことになりました。お姫様は大變落膽して、悲しまれました。そこで王子の家來達は、大勢でしたので、王子はお姫様に、一人で淋しいお室にゐずに、皆と一緒に面白く遊ぶやうにと、言ひきかせました。又悪い人間と交際はぬやう、悪い事に耳を假さないやう、他の女達と話合はぬやうにと種々、云聞かせました。お姫様は、その事を必らず良く守りますと約束しました。で、王子は愈旅に出ました。後に残つたお姫様は自分のお室に入つたきり、一足も外へはお出になりませんでした。

それから暫らくの間といふものは何事も無しに過ぎて往つてしまひました。すると。ある日の事です。お姫様がお室の小さな窓に腰をかけて、獨り淋しく泣い

てゐますと、ついその下を一度も見も知らぬお婆さんが通り掛りました。そのお婆さんは、いかにも汚い貧乏な姿で、拐杖の上に兩肘を掛けて凭れかゝり顎を兩手に載せながら、御機嫌とりの丁寧な言葉で、お姫様にかう言ひました。

「如何なさいました？ 可哀想なお姫様、お姫様は、いつも左様して御嘆きなすてゐらつしやるので御座いますか？、何卒まあお姫様、少しはお室をお出になつて、神様の御拵へになつたこの美しい世の中を御覽遊ばしませ。あなたの小さなお庭へお下りなすつて、奇麗な緑の草の中をお歩ひ遊ばしましたら、お哀しみの御心なんぞは、もう何處かへ往つて仕舞ふで御座いませう！」
お姫様は暫時この婆さんの言ふことを承知しなかつたのでしたが、遂々考直して。

「庭へ下りて、あの小川を渡る位は何でもない事、悪いわけは無からう。」
と胸の中で極めて御仕舞ひになられました。けれどもお姫様は、この哀れ氣な

婆さんか、實は魔法使ひで、お姫様の幸福を妬んで、遂々亡き者にしてしまはうといふ怖ろしい企圖から來たものだとは夢にも知らう譯はあかりませんでした。で、お姫様はこの婆さんに手を引かれて庭に下りました。すると婆さんは又悪企みの、追従口を利くのでした。この庭には、向ふの山の麓から流れて來る小川があつて、水晶のやうに透明つた水を満えて流れてゐるのでした。

「お姫様、まあ如何で御座います。こんな暑さで、お日様は赫々と頭の直上で燃えてゐますのに、この伶俐な小川奴はまあこんなに冷たくつて、奇麗で、いかにも涼しさうにちやらく、流れてゐるぢや御座いませんか、御姫様、如何で御座います。一つこの小川で、一寸そのお冷たいのを御浴びになられましたは？」

かう婆さんは言ひました。

「否、否、あたしは、厭！」

とお姫様は御答へになられましたけれどもまた、御胸の中でかうお考へ直しになりました。

「併し、何故不可いのだらう。一寸位この川の中へ入つたつて、何の害にもなるまいぢやないか。」

かう考へた御姫様は、長い薄布の上衣をお脱ぎになつて、小川の中へ、ぼつちやりと御入りになりました。するとその魔法使ひの婆さんは、お姫様が御入りになるより早く、お姫様のお肩を叩いてから言ひました。

「さあ、お前さんは今日から白い家鴨になつて泳ぎ廻つてゐるんだよ。」
その上、その魔法さんは、直ぐにお姫様の上衣を自分に纏けて、奇麗に御化粧をなし、お姫様の御婆に入り、お姫様のお椅子に座つて、王子様が長い旅から御歸りを待つてゐました。やがて小犬が吠え、小さな鈴がちりんと鳴りましたので、魔法婆は、早速飛んで出で王様の首に抱きついたり、接吻をしたりして、

王子を飼りました。王子は大變に御悦びになつて、兩手を婆さんに投げかけました。王子は勿論、自分の前に立つてゐる女が、自分の本當のお姫様でなくつて、實は性の悪い魔法婆さんだとは氣付かなかつたのです。

こちら、お姫様の方では、白い家鴨になつて毎日奇麗な小川に遊んでゐました。そしてやがて卵を産むでそれを子供に孵しました。その中で初めの二羽は、ちゃんと立派に孵りましたけれども三羽目は半孵へりで満足ではありませんでした。が兎にかく、この子供達は丈夫に育ちました。お母様の白い家鴨は上手に大切にその子供を育て上げたのです。子供達は段々と大きくなつて、小川を泳ぎ廻るやうになりました。そして金魚を取つて喰べたり、藁屑を咬へたり、毛並を直したり、川岸を馳けまはつたり、原場の景色を眺めたりして、遊んでゐました。けれどもお母様の白鴨は、始終かう子供達に言ひ聞かせてゐました。

「彼方の遠くへは決して往ちやなりませんよ。彼方には悪い魔法使ひがゐります。

お母様も酷い目に會はされたのだから、お前達も屹度ねらはれますよ。」
 けれども子供達はお母様の言ふ事を聞き入れないで、或る日、野原の草の上へ
 出て遊びました。次の日になると今度は、蟻を喰べ乍らどンドン遠くへ往つて、
 遂に王様の御庭まで這入つて仕舞ひました。魔法婆さんは、この家鴨の子供達の
 来たことを、見ないでもちやんと承知して、ざりざり歯ざりしりをして怒りまし
 た。けれどもこの婆さんは、面はいかにも親切相に家鴨の子供達においしい御馳
 走を呉れてやり、家來に言ひつけて栖屋をこしらへた上に、今度はお庭に火を燃
 かせて鍋をかけ、それから洋刀を研がせました。二羽の子家鴨はぐつすと寢込
 んでしまひましたけれども、半解りの子家鴨だけは、平常からお母様に、二羽の
 兄弟が風邪を引かないやうに懐へ抱いてゐるやうにと、云ひつけられてゐるだけ、
 耳を澄まし眼を睜つて、四邊に氣をつけてゐました。眞夜中になると、魔法使ひ
 の婆さんは子家鴨等の寢てゐる室の、戸口の處に來て申しました。

「皆はもうお寢みかい？、それともまだ？」

半解りの子家鴨は、二羽の子家鴨に代つて答へました。

「わたし達は夢なんぞを見ちやみせんよ、ね、あなたが私達をみんな殺して
 終ひたがつてゐることを考へながら寢てゐるんですよ、……楓の大薪が山に積
 んで燃えてゐるし、鍋は煮えたつてゐるし、庖丁はよく研いであるし。」

「おや、まだ寢つかないんだな。」

婆さんはぶつ／＼言ひながら、其處を去つて、其處邊をぶら／＼歩き廻つてか
 らまたその戸口の處へやつて参りました。

「みんな寢ついたかしら、それともまだかしらん。」

すると半解りの家鴨は、又子家鴨の代りに栖屋の上から怒鳴りました。

「わたし達は夢なんぞ見てやしません。それ所が、あなたが私達をみんな殺し
 てしまひがつてゐたことを考へながら寢てゐるんです、楓の大薪は山に積んで

燃えてゐるし、鍋は沸つてゐるし、庖丁はよく研いてあるし。』
そこで婆さんは、

『はてな。何時でも同じ奴が同じ聲で物を言つてるやうだが、どいつ奴だらう
な。一つ覗いて見てやれ』

といふので、遂々婆さんは、戸を開けて中を覗いて見ると、二羽の子家鴨はぐ
つすりといふ氣に寢込んでゐました。そこで婆さんは早速その二羽を殺してしま
ひました。

次の朝、お母さんの白い家鴨は、自分の子供達を大きな聲で呼び乍ら探し廻り
ましたが、返事さへありませんので、お母様の胸には、蟲の知らせか何か悪い事
が起つた様な氣がしました。それで身慄ひして王様のお庭に飛んで行きました。
行つて見ますと其處には、小さく白布のやうに眞白に、死んだ魚のやうに冷たくな
つて、二羽の子家鴨が死んでゐました。お母様の鴨はもう無中になつて、子供等

の上うへに身みを投なげかけ、羽は叩たたきをしてはその周まわりを歩あき廻まり乍はら、お母お母様様らしい慈あは愛いのこもつた聲こゑで、啼なきたしました。

『可あ哀いの子こ供ども等ら、カカツ、く、く、く、

可あ哀いの子こ供ども等ら、カカツ、カカツ、カカツ、

怖ころろ苦くししささ厭いとははずに

悲かなししささ、辛つらささおおももははずに

夜よももおおちちくく眠ねららずに

甘ういい御ご飯はんももいいたたかかず

ここれれままでで大おほききくく育そだてたに

カカツ、カカツ、カカツ、カカツ、く、く、く、

處ところががここの悲かなしい歌うたを、王わう子じが聞きかれて、早さつ速そくおお姫ひめ様さまに化かけてゐる婆お婆さんさんの魔ま法ほう
使つかひひににお尋たづねねににななりりままししたた。

「お前はあの歌を聞いたか。」

「まああなたは夢を見ておらつしやるのですね、あゝさう／＼、わたしの家來共がお庭であの白家鴨を追ひ出してゐるんでございますよ。」

家來は白い家鴨を追ひ出さうとしました。けれども白い家鴨は、子供等のまはりぐる／＼と飛廻つては、又啼くのでした。

「可愛い、子供等、カツ、カツ、カツ、

可愛い、子供等、カツ、カツ、カツ、

魔法使ひの老ぼれが

蛇みたやうな鬼婆が

可愛いお前の首絞めた。

情を知らぬ毒蛇めは

婆を代えて化けてゐる

その毒蛇めはわたし等を

お父様からひき離し

小川の中へ投げ込んで

白い家鴨にして仕舞ふた

その鬼婆は化け込んで

ほんとの様に威張つてる。」

王子は何か不吉なことが起つてゐるに相違ないと氣付いて、直ぐ様家來に言ひつけました。

「あの白い家鴨を連れて來い。」

そこで家來達は早速、言付け通りに、急いで往つてその白い家鴨を捕まへやうとしましたが、白い家鴨はぐる／＼輪を描いて飛び廻つてゐて如何しても捕まへられませんでした。で遂に王子が自身で椽竈に出で御覽になりました。すると白

い家鴨は王子の御手の上に飛んで來ました。王子はその家鴨の體をふわりと抱いてさて家鴨に向つて申しました。

『白い様よ、わしの前に立て、美しい娘よ、わしの前に立て』

すると白い鴨は以前の美しいお姫様の姿に變りました。そして鵲の巢の中にある生命の水と言葉の水とを取つて呉れるやうに頼んで、まづ生命の水を子供等の軀に吹きかけて生返らせ、それから言葉の水をかけて口の利けるやうにしました。そこで王子は急に生き返つて來たお姫様や元氣のいゝ子供達に取巻かれて一緒に暮し一緒に遊び、良い事をして悪い事を避けて過すことになりました。

魔法使ひの婆さんは、王子の御命令で馬の末尾に結付けられて、廣い荒野の中へ引ずられて行きました。そして澤山の鳥共が集つて來て婆さんの軀を啄いて喰べて仕舞まひました、そしてその骨は天から吹いて來た風に吹き飛ばされて跡方もなくなつてしまひましたとさ。

—終—

